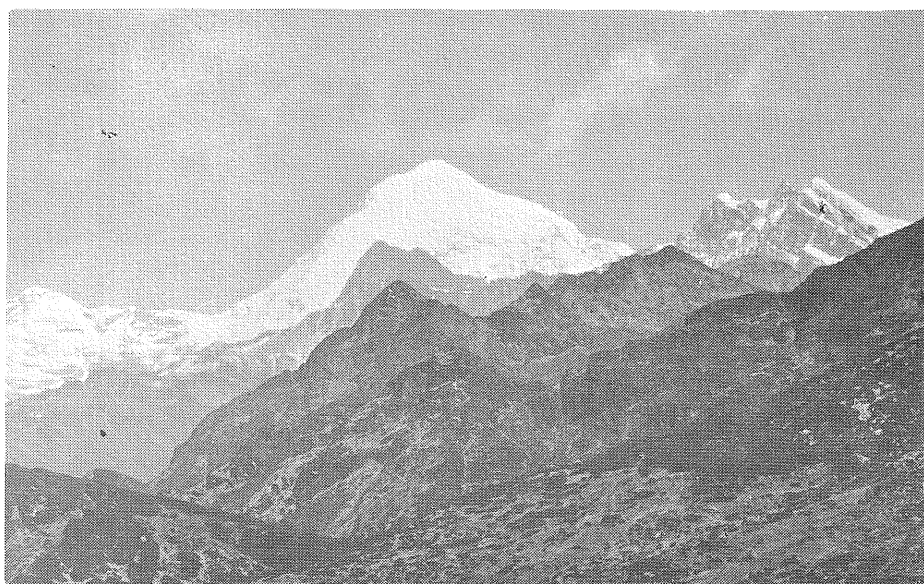


会 報

1979

No.9



ブータン ヒマールの秀峰 チョモラーリ (7,315m)



神戸山岳会

目 次

昭和 54 年度総会報告・新役員	3
------------------	---

昭和 54 年度冬山合宿計画	3
----------------	---

昭和 54 年度夏山合宿計画	4
----------------	---

行動日程	4
------	---

A 班登攀記録	5
---------	---

池ノ谷中央壁右ルート	星野辰也	5
------------	------	---

池ノ谷中央壁左ルート	神田章吉	6
------------	------	---

ドーム稜	幸内義孝	7
------	------	---

六峰Dフェイス・富山大ルート	幸内義孝	7
----------------	------	---

剣尾根・R4	星野辰也	8
--------	------	---

チンネ・左稜線	神田章吉	9
---------	------	---

チンネ・日嶺ルートへムバンドブリラック	神田章吉	10
---------------------	------	----

剣尾根下半(R1 ~ R3)	神田章吉	10
----------------	------	----

下山(剣岳本峰越え ~ 室堂)	神田章吉	12
-----------------	------	----

B 班行動記録	13
---------	----

毛勝三山	山本泰彦	14
------	------	----

夏山合宿の反省	田中正裕	15
---------	------	----

個人山行	17
------	----

白馬岳主稜(5月)	植原清明	17
-----------	------	----

尾瀬ヶ原(5月)	幸内義孝	21
----------	------	----

奥秩父縦走(4月)	山本泰彦	22
-----------	------	----

鳳凰三山縦走(4月)	大下澄子	26
------------	------	----

鹿島槍, 爺ヶ岳縦走(5月)	国沢昭美	27
----------------	------	----

白山(2702.2m)(5月)	山本泰彦	28
-----------------	------	----

穂高縦走(7月)	国沢昭美	30
----------	------	----

明神主峰東稜 ~ 壺岩中央ルンゼ(7月)	星野辰也	31
----------------------	------	----

荒島岳(5月)	幸内義孝	33
---------	------	----

梅用の穂高(6月)	植原清明	33
-----------	------	----

丹沢山(7月)-----	幸内義孝	38
北信五山(8月)-----	山本泰彦	39
黒部丸山東壁・緑ルート(9月)-----	小林利樹	42
明神五峰東壁・中央リンネ(9月)-----	神田章吉	43
巻機山・苗場山(9月)-----	星野辰也	45
金木戸川九郎右衛門谷溯行(10月)-----	星野辰也	46
明星山・P5墓石稜(10月)-----	星野辰也	49
男体山(10月)-----	幸内義孝	50
明神岳東稜～穂高縦走(11月)-----	小林利樹	50
荒川三山～赤石岳縦走(11月)-----	大下澄子	51
南アルプス南部(11月)-----	幸内義孝	52
恵那山(11月)-----	大川綾子	53
奥美濃の山(その1) 大日ヶ岳, 高賀山(5月)	山本泰彦	54
奥美濃の山(その2) 能郷白山(9月)---	山本泰彦	56

宮崎国体(山岳競技成年女子の部)に参加して---	萩本維都子	57
--------------------------	-------	----

石澄の岩場-----	神田章吉	60
------------	------	----

新・但馬の山々-----		63
--------------	--	----

仏の尾・青ヶ丸・瀬川山(3月)-----	山本泰彦	63
須留ヶ峰(4月)-----	山本泰彦	66
黒尾山・氷ノ山(11月)-----	山本泰彦	69
植松山(俚称 小河内山)(11月)-----	山本泰彦	71

例会トピックス-----		73
--------------	--	----

会員動静-----		76
-----------	--	----

編集後記-----		76
-----------	--	----

表紙 写真 片山英一

昭和 54 年度総会報告・新役員

去る 5 月 13 日、登山研修所にて総会がおこなわれ、下記事項が決定した。

新任委員

委員長 岸本

副委員長 梅原

運営委員

企 画 三浦, 幸内, 神田

装 備 幸内, 屋加

月 報 星野, 大下, 堀田

庶 務 萩本

会 計 萩本

矢連役員

理 事 岸本

評議員 —

分科会

技術 梅原

遭対 上原

山の集い —

海 外 —

リーダー会 野上①, 内藤②, 三浦

神田, 星野, 宮本

正会員承認 上原

昭和 54 年度冬山合宿計画

期 間 54 年 12 月 29 日 ～ 55 年 1 月 4 日 (内 3 日間予備日)

登山地 A 班 天狗尾根より鹿島櫓ヶ岳 ～ 簗ヶ岳

B 班 赤岩尾根 ～ 鹿島櫓ヶ岳

参加予定メンバー

A 班 C.L 星野, 川辺, 上原, 神田, 小林

B 班 C.L 矢木, 山本, 山内, O.B 岸本,

昭和 54 年度夏山合宿報告

今年度の夏山合宿も例年通り剣岳を中心に行なわれました。計画は前半は中堅会員と新人会員に二分し、中堅は岩登り、新人は縦走を行ない、後半三ノ窓にて合流の上雪上訓練及び登攀活動を行なうという予定であったが、一新人会員の持病の為合流出来なかったことは真に残念であった。この日の為に毎週トレーニングを行なって来た他会員には気の毒であったが、秋の個人山行にそのエネルギーを活用してもらいたい。又本合宿で中堅会員の登攀において、迫力不足が感じられた。今日のKACの柱ともなるべき者はもっと主体性を持ち大なる山へ向って行動したいものだと感じた。

参加者 A班 星野(CL), 内藤②(登攀L), 幸内(SL・食料)
 神田(装備), 植原(装備), 上原(食料), 岸本(OB)
 B班 田中(CL), 矢木(SL・装備), 山本(食料・記録)
 小林(渉外・装備), 川辺(装備), 迫田(食料), 堀田(食料)
 国沢(記録・気象), 太下(会計, 医療)

行動日程

8月12日 A班 大阪発(前夜)― 富山 ― 上市 ― 馬場島 ― 二保
 ― 三ノ窓
 B班 大阪発(前夜)― 魚津 ― 阿部木谷 ― 毛勝谷
 ― 毛勝山

8月13日 A班 中央壁右ルート ----- 内藤②, 星野
 中央壁左ルート ----- 神田, 植原
 ドーム稜 ----- 幸内, 上原
 B班 毛勝山 ― 猫又山往復 ― 毛勝谷下山
 岸本さん池ノ谷より単独入山

8月14日 A班 剣尾根R4 ----- 岸本, 内藤②, 星野
 4シネ左稜線 ----- 神田, 上原
 Dフェイス富山大ルート --- 幸内, 植原
 B班 水取入口 ― 魚津 ― 帰神

8月15日 A班 4シネ日嶺ルート ----- 神田, 上原
 内藤② --- 池ノ谷より下山
 他 4名停滞

8月16日 A班 剣尾根下半 ----- 神田, 植原
岸本, 星野, 幸内, 上原池ノ谷より下山
8月17日 神田, 植原本峰より室堂へ下山

A班登攀記録

池ノ谷中央壁右ルート

星野辰也

8月13日 メンバー: 内藤②, 星野

三ノ窓(6:15)——中央ルンゼ(9:00)——取付(9:15)——ピナ
クル下(12:45)——ドームの頭(17:15)——三ノ窓(18:15)

三ノ窓より3パーティー揃って池ノ谷へとガウガウの左俣を下降する。R₂は思ったより雪渓が豊富である。R₂は年々崩壊が進んでいるようだ。αルンゼは先行パーティーが安全地帯に下降するまでじっと待つ。ここで清ヤンがスリップをする。登攀前のいやな4ョンボだ。最初の懸垂下降は不確実なボルト1本で30m程下る。クライミングダウンと計3回の懸垂下降で中央ルンゼに到着する。ドーム稜に1パーティー, 中央壁左ルートは満員だが、中央ルンゼはゼロである。さっそく登攀準備をし他パーティーと別れる。中央ルンゼは最初は容易なルンゼを2ピッチ(皿級)登るとF₄の取付だ。F₄は水に濡れ非常にいやらしい。20m程ローピンなので脆い岩にハーケンを打ったがあまり効いていない。濡れた小さなスタンスに立ち1mぐらいの浮いた岩の上に乗れやうと上部のハーケンにとどく。ここから人工で4ョッフストーンの下に、次にこれをかかえて乗越す。ちょっとシビラーである。その上に又しても大きな4ョッフストーンがある。これは左を廻り込んで登ると急に明るいテラスに着く。これよりガラ場を10m登り、左ルートの取付となる。左ルートは初登ルートらしく、途中ボルトは1本もなく、又ハーケンも積極的に使用するところは1本もない。1ピッチ目は草付のトラバースで岩も脆く難しい。40m一杯で外傾テラスに着く。2ピッチ目は凹角状の岩を目指して凹角の下でビレー、3ピッチ目は凹角を15m登りハイ松帯に入る。急なハイ松帯を40m登るとピナクル直下の快適なテラスに着く。ここで一服する。ピナクルは左から右へ廻り込んで登る。ピナクルからは3mほどクライミングダウンをして再びハイ松帯を左へトラバースして登攀を終る。あとはハイ松帯を100m程登って剣尾根上半の縦走路へ出る。ドーム稜のパーティーを首を長くして待ち三ノ窓へ帰る。三ノ窓では岸本さんがさらに首を長くして持っていた。

池ノ谷中央壁左ルート

神田章吉

8月13日 メンバー 神田、植原
出発(6:00) — 取付(9:00) — 登攀開始(10:
30) — 登攀終了(17:45) — コルB(19:00)
— 帰幕(20:00)

我々の前に1Pいる。その上には、3人づれのパーティーがあって、登るが、おそいし、ハーケンが落すし、落石はするし、まったくけしからん。1時間半ほど時間待ちをする。長い時間待ちのため、ピッケルを取りつきに忘れてしまい、後続のパーティーに、もってきてもらう。

1P目、清やんがトップ。1度スリッパして、1mほど落ちる。その上は、細かいフェース。人工でいく。(そういうぼくも凹角でアブミをかけたアイスハーケンが抜けて、ぶらさがりました。) ハングの下で清やんはアブミにのって、ぼくは、その下でフィーフィを使って時間待ち。

2P目は、ハングを東越し、人工で直上し、横に入っているクラックをトラバースし、再び人工で直上。テラスにつく。ここで再び時間待ち。ドーム稜のパーティーとコール。

3P目、右に斜上気味に登り、次は左斜上気味に行く。ハーケンや、ボルトはあるが、こまかいフェースである。ルートが、わからず、清やんや下のパーティーに指示してもらう。ガスが次第にあたりをつつみ、池ノ谷独特の陰気くささと、時間的なあせりとか、俺の心を圧迫する。登っている時間より待っている時間の方が長いんじゃないかな。

4P目、ホールドの細かい凹角を直上し、ハイ松のバンド。

5P目、3級程度の岩、10mほど。ハーケンが1本打ってあるが、グラグラ。ここで中央壁の下半は終り、岩のごろごろした踏跡をたどる。上部にあるピナクルまで2P。すきなところを登れる。後続パーティーはピナクルを登らず、左の方をまいてコルBへ向った。

ピナクルよりクライミングダウン。ルート図では、ここより右側の傾斜の落ちた壁を登るよう示されていたが、時間が時間なので、左側の踏跡をたどり頂上まで。もう6時近くなっていた。太陽は西の山に沈みそうであったけれど、ガスは晴れ、登攀終了後の爽快感とともに、まわりの山々が我々2人の心をなごませた。

ここより、クライムダウンの連続でコルB。コルBより2回の懸垂でR₂の取付に着いた時には、うす暗かった。朝からうろく腹に物を入れていない我々が、ヨタヨタ帰幕したのはPM 8:00。岸本氏がテントの中に見えました。おそくなって、すいませんでした。

ドーム稜

メンバー 幸内、上原

8月13日、晴天に恵まれ、一度登って見たかったドーム稜を今日は登ると思うと、何となくうれしいうような、又不安な感じであった。R₂を越え、メルンゼを下り、ドーム稜に取付く。初めて見る地ノ谷中央壁、ドーム稜、中央メルンゼ、まさに井戸の底という感じであった。でも、僕たちは多くの仲間と行ったので、不安はその時あまりなかった。ドーム稜の取付を知えてもらい、1ピッチ目を行く。難しいなあと思う所は、ハーケンがたくさん入っていて、そんなに恐くなかった。岩登りよりハイ松岩ぎの方が多々ように思われた。最後のマンメリークラックは上原氏が登りたいといったのでまかすことにする。感じとしてそんなに難しくなかったようだ。ドーム稜を抜ける。N氏、H氏が待っていてくれて、テントに戻る。

(幸内記)

六峰Dフェイス・雪山大ルート

幸内義孝

メンバー 植原、幸内

8月14日 晴天に恵まれ、今日は一番の不安であるDフェイスの登攀である。取付に着くと、順番待ちである。横で待っていると、次から次から来ていつまでも登れない。寒さをこらえて後につく。1ピッチ目は少々難しく思えたが、ハーケンが要所要所に入っていてそれほど不安ではなかった。5ピッチ目は快適なカンテクライミングであった。その後はもう頂上直下である。高度感があり、明るく岩場であったが、人が多いく大阪の地下街のようだ。)のが、もう幻滅である。登攀後、ハッ峰上半部経由でテントへ戻る。



剣尾根・R4

星野辰也

8月14日 Xンバー：岸本，内藤②，星野

三ノ窓（6：00）— R₄ 取付（7：00）— 核心部終る

（9：15）— ドームの頭（11：30～13：15）—

三ノ窓（14：20）

剣尾根のルンゼで最も困難でかつ快適なR₄ はフリークライミングの豪快なルートであった。本ルートを実に17年ぶりに登られた岸本さんの腕前には新ためて驚かされた。

ルートは取付より15 m登り，ハング下で登攀を開始する。1ピッチはガレたバンド状のところを30 m登りビレー，2ピッチ目はルンゼ状のスラブを登りテラスに出る。これより2 mの懸垂滝をフリーで登りR₄へ戻る。3ピッチ目は10 mほど階段状のルンゼ内を登りハングした滝の下でビレー，4ピッチ目は実に快適なフリークライミングで最初は垂直の滝を越え，ルン内を左右の壁を利用してぐんぐん登る。5ピッチ目は右のスラブ状の壁を登り大きなチョックストーンを登り4ムニー下でビレー，6ピッチ目は4ムニー右側の非常に細かりスタンスのスラブを登る。堡塁岩を登っているようだ。このピッチと次のピッチがR₄の核心部である。次のピッチは逆層のスラブで4ムニー右側の壁をハーケンを使って登る。岸本さんらは左の4ムニーを登ったらしいが，ツルツルの逆層のスラブでV+のフリーだ。4ムニーの乗越しはハーケンの上に乗って越える。ここから容易なルンゼを40 m登りテラスでビレー，ここで実質的なR₄の登攀を終る。ここからルンゼ内をコンテで2ピッチ登り，右のハイ松帯を登る。稜線の右側はスッパリ切れてものすごい高度感だ！ここから草付とハイ松帯を3ピッチ登りドームの頭へ出る。

ドームの頭で同じR₄を登った金山氏ら登攀クラブのパーティーと日向ぼっこをして1時間半ほど過ごす。下降路のR₂の上部に大きな浮石があり，前日と比べて非常に危険な状態であった。以後の剣尾根への登降はむしろR₃を利用した方が安全であると感じた。（数日後，予想していたとうりかどうかは知らぬが，R₂にて事故があったらしい。）池ノ谷はそのアプローチと登攀終る後においても緊張感を要求する岩場であるとの認識を新たにした。三ノ窓に帰ると又しても4ムニーで死亡事故があり，他パーティーの事が気にかかる。

チンネ・左稜線

神田章吉

8月14日 メンバー 神田、上原

取付(6:30) — 登攀開始(9:00) — T5(14:30)
— チンネの頭(16:45) — 帰幕(17:30)

取付きに着くと、おたくは14番目ですと言われ、啞然とする。2時間30分、たっぷりと待たせていただく。

1P目、凹角、少しかぶり気味でバランスがわるい。正ちゃんをつるべで行くが、3〜4Pまでは、待たされる時間の方が長い。テラスには、2〜3人しか立てないところが多く、じゅうたい。T5までは、大体において、ピンが少なくもろい。

T5の手前のところで正ちゃんを確保していると、ドサッという音がして、まわりのパーティー(4パーティーほどいたかな)が、口々に「落ちた。」とさけんでいた。ぼくは、落石かなと思っていたら、何と2人(男女)の登攀者が、中央バンドからT5にトラバースの途中、滑落したのだった。コンテカスタカットからぬが、先に女性の方が落ち、一時はとまったのだが、それに引きづられた男性の方が、女性をも引き込んで、もっと下まで落ちた模様だった。

我々の前の3人パーティーは、「えらいもの見てもうた。ああ、こわ。」と言って、クレオパトラニードルの方へトラバースしていった。ふと気が付くと、他の3パーティーは、T5から姿を消していた。

ぼくは、ここぞとばかりに登り出した。ハングをフリーで越し、カンテ、リッツを快適に行く。チンネの頭で待っていてくれた清ちゃん、幸内さんと4人で帰幕する。

帰ってから、岸本さん、内藤さん、屋野さんらに、「何政事故の現場に居合わせながら、すぐ降りてこなかったのか。」と言われた。「不人情だ。」と言われた。俺は、ハッとした。三ノ窓には、人はたくさんいるし、事故がおこっても、その人たちが何とかしてくるだろうと、この事故を本当に他人ごとのように考えていた。又、本当のことを言うと、ぼく自身、直接には見ていないが、目の前で人が落ちたため、これ以上登り続けることが、恐かった。T5からの1P目は、威圧的でさえあった。ここで引返すことは、自分自身に負けることであるような気がした。(他の3パーティーは、事故

者救出のため、下山したのであった。)

しかし、本末転倒である。事故がおこった場合、まず、その事故者を助けることが、先決である。それは、内藤さんの言うように岩登りをする以前の人間としての問題だと思ふ。それに気付かなかった自分が、はづかしく、又なさけなく思った。

やはり、2人は死亡していた。労山のパーティーのようで、他の労山パーティーが協力して、徹夜で事故処理にあたっていた。

こんな夜にも、星空は冷たく美しく天上にあった。

チンネ 日嶺ルートへaバンドbクラック

神田章吉

8月15日 メンバー 神田、上原

出発(10:00) — 取付(10:30) — チンネの頭(12:35) — 帰幕(13:30)

今日は、休養日ということになっていたが、縦走隊も来ないことだし、正ちゃんと2人で日嶺ルートに行くこととなる。

1P目は、知らず知らずのうちに、ローザイルで登っていた。以後つるべ。2P目、4ニムーの中にルートをとる。けっこうバランスがわるい。カラビナ2つが置き忘れてある。正ちゃんと「そうかった。」と顔を見合わせ、ほくそえむ。

3P目、ハングをフリーで越す。岩もしっかりしているし快適。中央バンドにつきピナクルをコンテ。天気もいいし、気分爽快。94ニムーを登る予定であったが、他のパーティーがとりつりていたのでaバンドにトラバース。(4P目)

5P目は快適なフリー。ただし岩がもろい。チンネの頭で、ゆっくりと休む。こんなにのんびりできたのは、久しぶりだ。ゆっくり、池ノ谷ガリーを下りました。この日、きのうの事故のせりか、4ニネに取りつりているパーティーは、少なかったです。

剣尾根下半 (R7~R3)

神田章吉

8月16日 メンバー 植原、神田

出発(5:45) — R7 取付(7:00) — コルC(8:45) — 核心部取付(10:30) — ドームの頭(12

： 〇 〇 ～ 1 3 : 〇 〇) — 帰 幕 (1 4 : 3 〇)

縦走隊は来ないが、岸本、幸内、上原の3氏の下山日である。清やんとぼくは、剣尾根下半に行くこととなる。右俣を下り、R₆に取りつく。(本当はR₇) 1パーティとリッショになる。(う、とおもしろいな!) 最初の2ピッチはコンテでいける。(ぼくたちはスタカット) 本ではR₆からR₇にトラバースすると書いてあったので、登っている途中、いろいろさがしたが、トラバースしにくいので、そのまま登り、計7ピッチで稜線へ出る。途中、4ムニ、圓竜など出てきておもしろい登攀ができて、たのしかった。稜線に出て、アリヤッと思った。どうもコルCの少し手前のようなのである。R₆をつめるともっと上の方に出るはずなのに……。どうもR₇を登ってきたようである。2人で顔を見合わせる。

コルよりコンテでハイ松をこぐ。下部を見ると、同じようにハイ松が、はえ続けており、R₁₀からつめたさ、大変な労力だなと思う。ザイルやシュリングがひっかかって、仕方がない。

コルCで30～40分、前のパーティーの時間待ちをして取りつく。けっこラスタンズやホールドがあり、ピンもたくさん。リッツをトラバースするところ2ヶ所だけアブミを使う。(ピンは、グラグラ) リッツをまわりこんで、右側のフェース。ピンはベタ打ちされているが、すべてグラグラ。フリクションでそろり、そろりと登る。

ここよりコンテでハイ松をこぎ、ドームの岩塔の基部に出る。左にバンドをトラバースして、クラックから取り付く。岩もがっちりしているし、ガバッと手でつかめて、素晴らしい岩の感触である。つぱりや、フリクションで、かぶり気味のところを乗越し、大きな岩をガバッと両手でかかえるようにしながら左上する。この合宿で一番快適なピッチである。

次はフェース。そしてルンゼでドームの頭。ここより草つき(広原っぱ)で、とってもメルヘン的な雰囲気があって、よい場所だ。ただ少し、先が切れていて、あまりいい気持ちはしなかったけどぬ。)よりR₃を下る。壁がのっぺりとしていて、ルンゼというよりはフェース(スラブ)だ。気色悪いので、そろりそろりと降る。

帰幕すると、6～7人用テントが消えており吊天に置き手紙があった。予定の3氏に加え、屋野氏も下山すること。縦走隊は来ないようなので(毛勝から入山した2人パーティによれば)下山すること。(食料は、全部残しておりてくれたようだ。) その夜、清やんと食料をたふく食べ、のんびりとする。山の話、結婚の話、仕事の話。誰かい子はいなりかな～!

下山(剣岳本峰越え〜室堂)

神田章吉

8月17日 出発(9:00) — 剣岳本峰(12:00) — 室堂(17:35)

2人なので、のんびりと仕度を整える。食料は捨てるに、みんな持ち帰ることにしたので(19日まで滞在の予定であったし、縦走隊の分まで含まれていた)2人とも、相当な重量になった。

剣岳までは、踏跡はあるが岩場をトラバースしたりするのに、荷が重いので後へ引かれて、その度に体がふわっとしてあまりいい気持ちはない。

剣岳で、三菱の神戸支部の山岳部の人と会う。池ノ谷のR₂で負傷が出ようだ。ひょっとしてあの岩が落ちたんじゃ...と思いヒヤリとする。(岸本さんらの話によるとR₂のコルに近いあたりの大きな岩がグラグラしてりて、今にも落ちそうだったということであつた。だから、清さんと2人、きのうは、R₂からではなく、R₃から降りただけだ)。

少々雑談して出発。やはり一般の縦走路はいい。ペンキはついてるし、ハシゴはついてるし、ウサリも...。前剣の岩場も背中への荷のため、へばりつくようにして登った。前剣の頂上でバックパッキングの2人ののにいちゃんの食っていた弁当がうまそうだった。(きのうからバスケットばかりだから)清さんと2人で舌つづみを打つ。

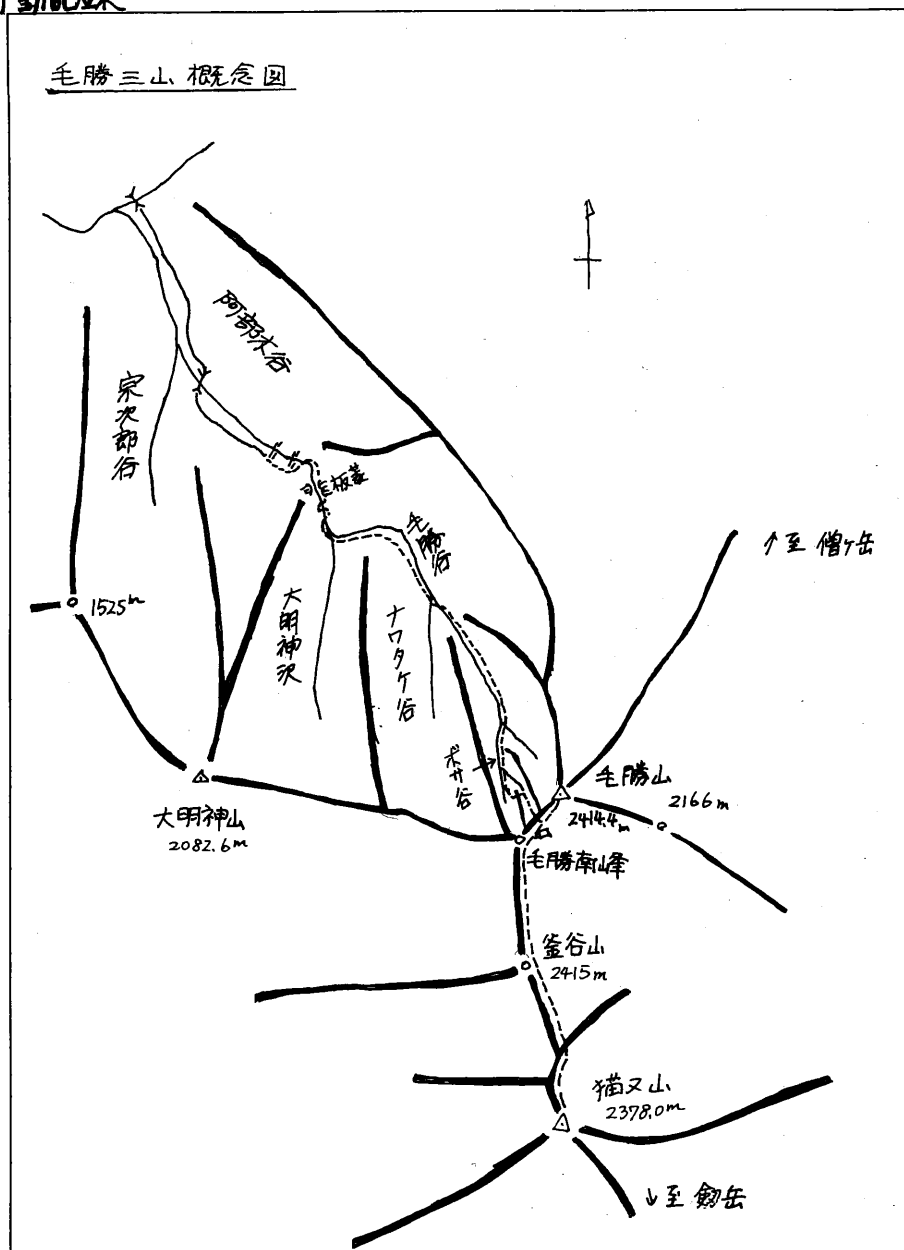
一度剣山荘まで下り、清さんのおごりの麦チュースを飲んで命の洗たく。しかし、次のピッチはこのチュースがききすぎて息がかりが荒くなり、目がくらみ.....アヘアヘ。

剣御前小屋についた時は、もう4時近くであつた。(室堂発の最終バスは17:35)「もう無理やで。」という清さんの言葉をしり目に、必死で下る。下におりて川を渡り、再び登り。途中、足がうりそうになり、ピッチが落ちる。室堂のバスターミナルが目前になったころ、足が完全にふり、清さんに先に行ってもらふ。通りすがりのサンダルや、ぶうりをはいたミーちゃん、ハーちゃんが、不思議そうな顔をしている。足を引きづってターミナルにかけこんだ時は、5分程過ぎていました。ああ残念と思いしや、清さんがバスを止めておりてくれました。ケーブルに乗り換え立山へ。今日はここで泊ろうという事になり、近くのユースホステルへ。カレー大盛り2はいに茶漬、ビール3本。店の人が「よく食うな。」と大笑い。「ほんとにしてくれ、こちらは朝から何も食ってねえんだ。」風呂に入り、洗たくをし、ゆっくり

寝ました。

8月18日 朝、喫茶店で新聞を読んでいると、17日の昼すぎ、小窓王南壁で、単独登攀者が40mほど落ちて死亡したとの記事が出ていた。(身故の多い年だ) その後登山研修所へ行き、ぼくは入阪へ、清やんは穂高へと向った。

B班行動記録



毛勝三山

山本泰彦

昭和54年8月12～14日

メンバー：田中(CL)、矢木(SL)、小林、堀田、川辺、迫田、国沢、大下、山本。8月12日(晴のち霧)大阪(前夜22:50)―魚津(6:25)―阿部木谷、水取入口(7:15～7:45)―板菱(8:10～8:20)―雪溪取付点(9:05～9:30)―大明神沢出合(9:40)―ナワタケ谷出合(10:35)―ボサ谷(12:50～13:05)―稜線(14:55～15:10)―毛勝山(2414.4m)(15:20～15:30)―毛勝山と釜谷山との鞍部(16:20)―幕営地(17:40)

魚津駅より手配のマイクロバス(金閣タクシー)で、片貝川を遡り、阿部木谷水取入口(標高:930m)まで乗る(6780円)。林道跡を約500mたどり右岸に渡る。左からの支谷が50mほどの滝をかけている地点を過ぎ、板菱で休憩する。板菱上部をトラバースし、左岸へ渡渉する。この後、2回渡渉し、雪溪へは左岸より取付く。大明神沢出合で左に折れ、ゆるい傾斜の毛勝谷にはいる。ここで雪溪は200m程途切れる。雪溪の左寄りにはデブリのなごりであろうか土砂の小山がいくつもあらわれる。ナワタケ谷出合を過ぎたデブリス跡でアイゼンをつけ、急に狭まった雪溪を急登する。(ナワタケ谷の方が毛勝谷よりも出合では傾斜もややゆるく、雪溪の中も広いので注意を要す。なお、この出合の草付は良き憩場にみえるが、新川氏一行が落石に見舞れた地点である旨、田中君より説明あり。)落石が者もなく足元を過ぎてゆく。両側が狭り、喉状になった地点は中10m程で雪溪も切れており、通過に気を配る。ここを過ぎると谷は二俣に別れ、雪溪もなくなった右俣(ボサ谷ともいう。)へはいり、浮石の多い谷をつめる。谷は涸谷となり、次の二俣も右へ取る。30m程の露岩に出合った所で谷と別れ、踏跡をたどり、急登後、左へトラバースし、涸谷にはいる。これをつめると毛勝谷南峰と北峰の鞍部へ飛び出す。黒部側は草原になっており、盛りを過ぎた高山植物が散見される。期待された展望は霧のため皆無。田中君と山本の2人だけ毛勝山頂上(北峰)へ向う。頂上には二等三角点があり、段丘状の草原と点在する露岩は、メルヘンの世界へいざなってくれる。僕が十三年前、白馬岳から望見し、剣岳を小さくしたような山塊が毛勝三山であることを知って以来、心に温めていた山頂に別れを告げ、稜線を剣岳目指してたどる。釜谷山と毛勝山との鞍部付近でH君が突然、精神錯乱を起し、下山することを哀願する。止むなくリーダーの判断で毛勝山南峰付近にあった幕営適地まで引返し、そこで幕営する。(水取入口から谷

を離れるまでの実稼働時間235分、休憩時間115分である。休憩を取り過ぎていたように思うが?)

8月13日(晴) 幕営地(9:00)——猫又山(2378.0m)(10:50~11:20)——幕営地(12:50~13:45)——雪溪上部(15:15~15:30)——ナワタケ谷出合(16:20~16:40)——大明神沢出合(17:05)——水取入口(18:40)

リーダーの判断で全員下山と決定され、本日は猫又山まで空荷で往復することになる。稜線上の径は大略、黒部側の草原を行くことになる。稜線上の登山径は相当踏み固められており、はっきりしている。白馬岳、五竜岳、鹿島槍の後立山連峰と剣岳がよくみえる、のんびりした山径である。今年は残雪も多いのが、釜谷山と猫又山との間に残雪が2ヶ所あり、水が得られ、早速ジュースが作られる。猫又山も黒部側が草原状である。三等三角点標石を探したがみあたらない。草原に寝ころび、手を伸ばせば届きそうな視界いっぱいには広がった剣岳を眺める。池ノ平山を目指すという2人パーティーが、よたよたと通り過ぎてゆく。お盆だというのに昨日から出会ったのは、4パーティー計9人である。剣岳まで行けなくなったという無念さ、はがゆさを胸一杯にして、往路を戻り、毛勝谷を下り、昨日マイクロバスを降りた水取入口で幕営する。

8月14日(快晴) 水取入口(7:40)——片貝オ四郎電所(9:15)——バス停「東蔵」(10:40~11:00)——魚津(11:30)——神戸

今日も晴、いや快晴といった方が正しいだろう。3人でまといつかれながら片貝川の林道を下る。昨日の下りで捻挫したS君のペースにあわせてのんびり歩く。山上では気のめいていたH君とバテバテのお嬢さんはスタスタ先頭を歩いている。一体どうなっているのでしょうか??

夏の暑い日射を受け、林道歩きにうんざりした頃、小坂橋、別又橋を至て富山地方鉄道バス「東蔵」バス停につく。

夏山合宿の反省

田中正裕

五年前に個人山行として、7月の毛勝三山の縦走をした折、毛勝谷の雪溪にて、岩雪崩に合ったが、幸いにも全員無事であった。以前にこの様な事があって、私にとって毛勝山は思い出深い山であった。

今年の夏山合宿B班は、毛勝三山を至て、三ノ宮までの起伏の厳しいコースを縦走する計画に決まり、客観的にも体力のみの山行であるのにもかかわらず、夏山合宿の例会に於いて、歩荷トレーニングが少なく、また欠席者が

たがった。(私も含めて……)

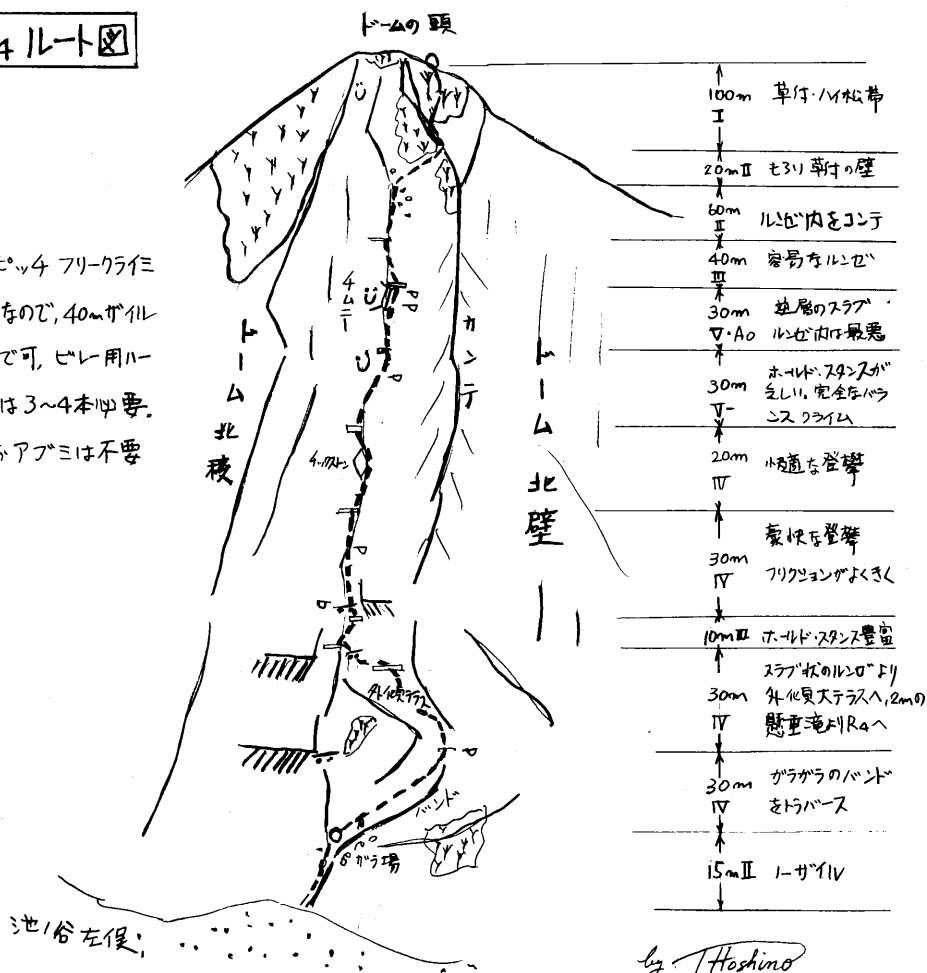
夏山に入山するに於いて、パーティー全体、コンディションを合やすことが出来なかった。このことから、今回の夏合宿縦走は、猫又岳までに留まったがこの山行の失敗は、ひとつのラキシデントだけによるものではなく、リーダーの私自身から、しいては、パーティー全員が、対象となる山を、甘く考えてしまっていた。25kg位の荷でも勝谷を登るのに、バテぎみでは、先の連山の縦走が、出来る訳がなく、私自身今回の山行を、以前にも勝へ来たこともあって、軽く考えすぎてしまった。今後対象となる山に合わせたトレーニングをみっちり行なわなくてはいけないと思う。

冬山を前に、トレーニングをしすぎて、しすぎる事はないのだ。ということ改めて再認識させられた夏合宿であった。

R4ルート図

注

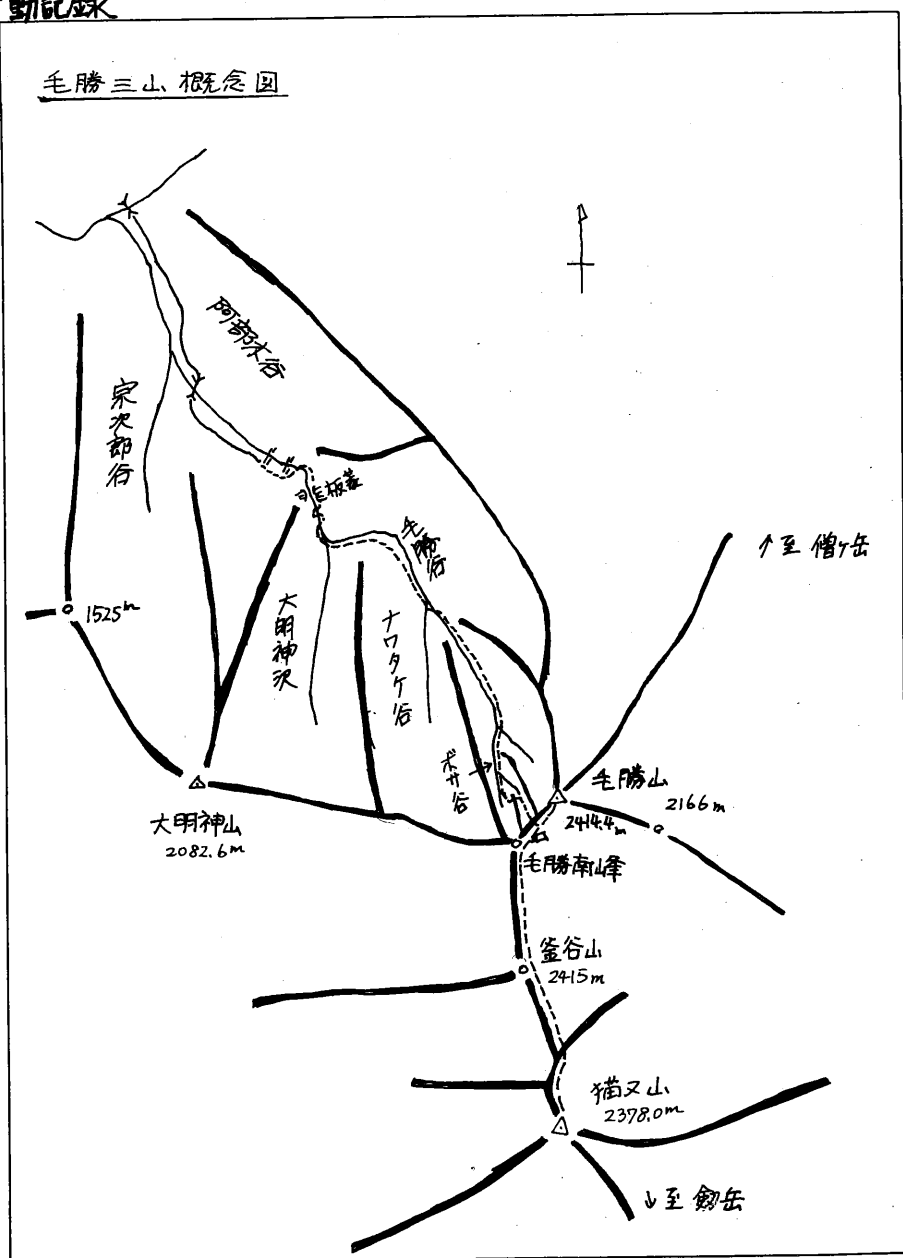
全ピッチフリークライミングなので、40mガレ1本で可、ヒレ用ハーケン3~4本必要。なおアプミは不要



by T.Hoshino

8月18日 朝、喫茶店で新聞を読んでいると、17日の昼すぎ、小窓王南壁で、単独登攀者が40mほど落ちて死亡したとの記事が出ていた。(事故の多い年だ) その後登山研修所へ行き、ぼくは又阪へ、清やんは徳高へと向った。

毛勝三山概念圖



毛勝三山

山本泰彦

54年8月12～14日

メンバー：田中(CL)、矢木(SL)、小林、堀田、川辺、迫田、国沢、太下、山本。8月12日(晴のち霧) 大阪(前夜22:50) — 魚津(6:25) — 阿部木谷水取入口(7:15～7:45) — 板菱(8:10～8:20) — 雪溪取付点(9:05～9:30) — 大明神沢出合(9:40) — ナワタケ谷出合(10:35) — ボサ谷(12:50～13:05) — 稜線(14:55～15:10) — 毛勝山(2414.4m)(15:20～15:30) — 毛勝山と釜谷山との鞍部(16:20) — 幕営地(17:40)

魚津駅より手配のマイクロバス(金閣タクシー)で、片貝川を遡り、阿部木谷水取入口(標高930m)まで乗る(6780円)。林道跡を約500mたどり右岸に渡る。左からの支谷が50mほどの滝をかけている地点を過ぎ、板菱で休憩する。板菱上部をトラバースし、左岸へ渡渉する。この後、2回渡渉し、雪溪へは左岸より取付く。大明神沢出合で左に折れ、ゆるい傾斜のも勝谷にはいる。ここで雪溪は200m程途切れる。雪溪の左寄りにはデブリのなごりであろうか土砂の小山がいくつもあらわれる。ナワタケ谷出合を過ぎたデブリ跡でアイゼンをつけ、急に狭まった雪溪を急登する。(ナワタケ谷の方がも勝谷よりも出合では傾斜もややゆるく、雪溪の中も広いので注意を要す。なお、この出合の草付は良き態場にみえるが、新川氏一行が落石に見舞れた地点である旨、田中君より説明あり。)落石が者もなく足元を過ぎてゆく。両側が狭り、喉状になった地点は中10m程で雪溪も切れており、通過に気を配る。ここを過ぎると谷は二俣に別れ、雪溪もなくなった右俣(ボサ谷ともいう。)へはいり、浮石の多い谷をつめる。谷は涸谷となり、次の二俣も右へ取る。30m程の露岩に出合った所で谷と別れ、踏跡をたどり、急登後、左へトラバースし、涸谷にはいる。これをつめるとも勝谷南峰と北峰の鞍部へ飛び出す。黒部側は草原になっており、盛りを過ぎた高山植物が散見される。期待された展望は霧のため皆無。田中君と山本の2人だけ毛勝山頂上(北峰)へ向う。頂上には二等三角点があり、段丘状の草原と点在する露岩は、メルヘンの世界へいざなってくれる。僕が十三年前、白馬岳から望見し、剣岳を小さくしたような山塊が毛勝三山であることを知って以来、心に温めていた山頂に別れを告げ、稜線を剣岳目指してたどる。釜谷山とも勝山との鞍部付近でH君が突然、精神錯乱を起し、下山することを哀願する。止むなくリーダーの判断でも勝山南峰付近にあった幕営適地まで引返し、そこで幕営する。(水取入口から谷

を離れるまでの実稼働時間は5分、休憩時間15分である。休憩を取り過ぎていたように思われる。

8月13日(晴) 幕営地(9:00) — 猫又山(2378.0m)(10:50~11:20) — 幕営地(12:50~13:45) — 雪溪上部(15:15~15:30) — ナワタケ谷出合(16:20~16:40) — 大明神沢出合(17:05) — 水取入口(18:40)

リーダーの判断で全員下山と決定され、本日は猫又山まで空荷で往復することになる。稜線上の径は大略、黒部側の草原を行くことになる。稜線上の登山径は相当踏み固められており、はっきりしている。白馬岳、五竜岳、鹿島槍の後立山連峰と剣岳がよくみえる。のんびりした山径である。今年は残雪も多いのが、釜谷山と猫又山との間に残雪が2ヶ所あり、水が得られ、早速ジュースが作られる。猫又山も黒部側が草原状である。三等三角点標石を探したがみあたらない。草原に寝ころび、手を伸ばせば届きそうな視界いっぱいには広がった剣岳を眺める。池ノ平山を目指すという2人パーティーが、よたよたと通り過ぎてゆく。お盆だというのに昨日から出会ったのは、4パーティー計9人である。剣岳まで行けなくなったという無念さ、はがゆさを胸一杯にして、往路を戻り、毛勝谷を下り、昨日マイクロバスを降りた水取入口で幕営する。

8月14日(快晴) 水取入口(7:40) — 片貝オ四発電所(9:15) — バス停「東蔵」(10:40~11:00) — 魚津(11:30) — 神戸

今日も晴、いや快晴といった方が正しいだろう。ろづにまといつかれながら片貝川の林道を下る。昨日の下りで捻挫したS君のペースにあわせてのんびり歩く。山上では気のめいていたH君とバテバテのお嬢さんはスタスタ先頭を歩いている。一体どうなっているのでしょうか??

夏の暑い日射を受け、林道歩きにうんざりした頃、小坂橋、別又橋を至て富山地方鉄道バス「東蔵」バス停につく。

夏山合宿の反省

田中正裕

五年前に個人山行として、7月の毛勝三山の縦走をした折、毛勝谷の雪溪にて、岩雪崩に合ったが、幸いにも全員無事であった。以前にこの様な事があって、私にとって毛勝山は思い出深い山であった。

今年の夏山合宿B班は、毛勝三山を至て、三ノ窓までの起伏の厳しいコースを縦走する計画に決まり、客観的にも体カのための山行であるのにもかかわらず、夏山合宿の例会に於いて、歩荷トレーニングが少なく、また欠席者が

たがった。(私も含めて……)

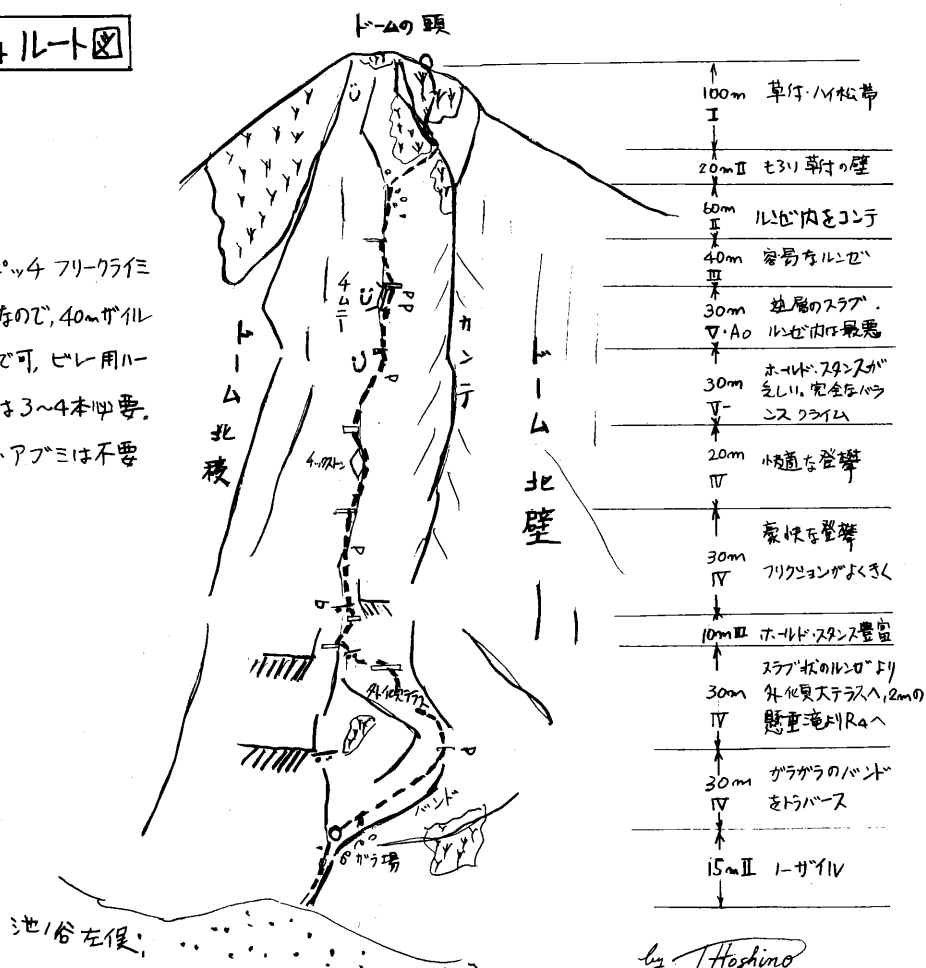
夏山に入山するに於いて、パーティー全体、コンディションを合おすことが出来なかった。このことから、今回の夏合宿縦走は、猫又岳までに留まったが、この山行の失敗は、ひとつのラキシデントだけによるものではなく、リーダーの私自身から、しいては、パーティー全員が、対象となる山を、甘く考えてしまっていた。25kg位の荷でも勝谷を登るのに、バテぎみでは、先の連山の縦走が、出来る訳がなく、私自身今回の山行を、以前にも勝へ来たこともあって、軽く考えすぎてしまった。今後対象となる山に合わせたトレーニングをみっちり行なわなくてはいけないと思う。

冬山を前に、トレーニングをしすぎて、しすぎる事はないのだ。ということをも改めて再認識させられた夏合宿であった。

R4ルート図

注

全ピッチフリークライミングなので、40mガイル1本で可、ビレ用ハーケンは3~4本必要、なおアプミは不要



by Hoshino

個人山行

白馬岳主稜

— 雪辱戦 —

植原清明

5月3日～5日 メンバー 植原、迫田、小林

白馬岳主稜、この尾根は白馬尻より白馬岳山頂にダイレクトに突き上げて
いる尾根である。この尾根の積雪期初登攀は昭和6年3月、神戸商大の田中
、関西学院の秋山、それに細野の丸山の三氏によってなされた。(中略)

ところで、この主稜について私が着目したのは、そもそもK.A.Cの委員長
岸本氏が野上②氏と共に攀じた苦労話をよくされていたので、それでは一度
アタックしてみようではないかと密かにおもっていた。その後、私の勤務先
の登山部が夏の白馬岳へ登った時、当山行のリーダーであったN君より山頂
より写した主稜の写真などを入手したりして希望だけはもっていたが、私自
身様々な点で山への情熱が薄らいでいき、断ち切れの状態で続いた。しかし
、この冬山に突っ入りともいふべき状態で参加させてもらって、またしても
山への情熱が湧いてきた。情熱というより情性がもしれな。山へ登る行為
、それは善か悪か？、中傷、批判、デマ様々なことが私の登山生活のなかで
おこなわれてきた。また私も他者に対してそうしたことをおこなってきたか
もしれない。しかし、どうでもいり、私にとって冬山を契機に旧の登山とは
かけ離れた新たな登山というものに向って行るのは確かだ。(中略)

この白馬岳主稜へは去る3月、三浦・星野・それに私の3名にて攻撃をか
けた。しかし、降雪、吹雪のためあえなく敗退という結果に終わってしまった
。このゴールデンウィークはその雪辱戦をおこなったかったが、何かと落ち
着かないまま、刻々と時間が経過していった。そうこうしている時、迫田・小
林両氏と知り合い、心強いおもいで5月3日～5日、主稜より白馬岳へ拔
け、そこから唐松まで、そして八方尾根を下る計画で、準備にとりかかる。

(中略) 編集者③ 小林、迫田両氏は“きたぐに”にて猿倉へ、清やんの
お仕事の都合で、車で単独猿倉入りとなる。

猿倉への道路は3月末に来た時と、1ヶ月位しか経過してないのに様変
わりである。3月の時は二股から雪道であったが、今では桜が満開、それに
道路上は雪の面影さえない。二股からは雪をぶっしりまとった不帰の壁が眺
められる。猿倉のバス停にて車を停め、登山服に着換えて猿倉小屋を目指す。

3月の時、窓から出入りした小屋も、今ではすっかり雪が解け玄関の扉が開いていた。小屋には迫田、小林氏が首を長くして待っていてくれた。切角の雲ひとつなり晴天である。長居はできない、すぐに出発する。猿倉から雪道になり白馬尻へ。白馬尻では数人のスキーヤーがスキーを楽しんでいた。彼らをはた目に主稜に向かって黙々と進む。末端P(ピーク)へは消えかかったトレースがあり、それを辿ることにする。3月の時より白馬沢よりから取り付く。ここを辿り、一雨くれば雪崩の危険性が非常に高く、その痕跡が所々残っていた。やがて末端Pへ。ここはこの3月に敗退した箇所だ。あの時は降雪、地吹雪など山は冬であったが、今はもうすっかり春の様相だ。杓子岳がまともに眺められ、それに続く杓子尾根、風もなく、雲もなく、寒ささえもなし。冬山のような身突き差す寒気、烈風はなくのんびりしたものだ。

この末端Pからは白馬沢、大雪溪沢面側きれおちたナイフリックである。しかし、立派なトレースがある。末端P付近に整地された幕営地があり、そこで今宵の宿とする。ツェルトを張り、食事を済ませて周囲の山々に眼をやれば、アプローチの苦労も忘れ、山にきた喜びがふしふしと込み上げてくる。しかし、私達は主稜の末端ににいるに過ぎない。白馬岳山頂方向を眺めれば、雪壁が立ち塞がっている。夕暮れとともに星がまたたき白い峰々が浮きたち、細野の灯がみえファンタジーな世界であるが、明日の現実的な不安と期待の方が私の心の多くを占めている。

翌朝、5月4日 4時20分、暗闇のなかを出発する。上部にヘッドライトの灯がみえ、1パーティ入っていることがわかる。雪はクラストしてアイゼンが心地よく響く、途中御来迎を迎えながらも淡々と進む。二峰付近で急に息苦しくなってきた。迫田・小林氏に待ってもらい、夏蜜柑を食べる。ほどより酸味が口のなかで調和し、体調が戻った。二峰を越え最後の雪壁へ、先行パーティが居り立派なトレースがある。アンザイレンすることもなく、幾分腐りかけた雪壁を攀じ7時20分山頂についた。余りにもあっけなり登頂である。3人で握手をかわしたが、これといった感激もなく、ただ1つの課題、11や1つの過程かもしれなり、それが終わったとった風にしか感じなかった。余りにも山の好条件が出来過ぎていた。余りにことが淡々と運んでいくことに恐しさを感じた。迫田・小林氏は何と感じただろうか。

一応、これで主稜の登攀は終り、唐松岳への縦走に入るのだが、主稜について私なりに感じたことを付記しておこう。

主稜につりては一般にハ峰からなるといわれているが、実際そこを登ってみて、これといって特徴あるピークもなく、どこが何峰かはっきりわからなかった。全般的にリッヅ通しの登りになり最後の山頂直下が雪壁となる。一応の目安として杓子付近近からの主稜図を示しておくことにする。

幕営地につりては末端Pの手前、並びに主稜上部位しか、幕営（吊天と張り前後張れるスペース）できるところはな。私達が末端Pを越えた所でツェルトを張れたのは、大雪渓側を削って整地されてたからで、実際、先にそうしたことがおこなわれていなければ、スコップ無しではとても張れるスペースが確保できるものではな。雪庇につりては、时期的、地形的要素により、細かくみる必要があるが、一般的には下半部は白馬沢側、上半部は大雪渓側、山頂部は主稜側に発達してた。

技術的な問題につりては、トレーヌがあり全く問題がなかった。トレーヌがなく、雪が締っておれば、ダブルアックスと出歯アイゼンでもっと快適な登攀が味わえたかもしれない。但しその場合、アンザイレンする必要がある。山頂直下の雪壁につりては、私達が取付いた頃、時間的に若干おそかったためか幾分雪が緩んでおり、ステップが崩れやすかったが、これとても雪が締っておれば快適であつたろう。もちろん、そうした快適さの反面、スリッパ上のリスクも増加し、それに伴って先に述べたようにアンザイレンが必要になってくるが。要は雪が締っている頃を狙うべきだ。

雪崩につりてであるが、白馬尻から末端Pまでは、全斜面雪崩れやすそうであり、実際その痕跡が著しかった。末端Pより上はそうしたことはあまり感じなかった。

兎に角、白馬岳主稜という一つの課題が終り、山頂に迫る。山頂付近は種々雑多な登山者で混雑してた。とりもなおさず、私達は唐松岳縦走というもう一つの課題を成し遂げねばならぬ。

白馬岳を後に、アイゼンのダンゴ雪を気にしながら、杓子、白馬鑓を過ぎ天狗平へ。そこで2時間近くトカゲして、天狗の大下り手前の黒部側の斜面で幕営。時間は14時過ぎである。

雪を削りツェルトを張った。ここはまた眺めがよい所だ。正面に剣岳がまともに見える。岩の殿堂剣岳も今は雪に被われ白亜の殿堂と化している。彼方には穂高、槍がみえ鹿島、五竜の偉容が眼を引く。また、明日向う不帰工峰を登っている登山者が手にとるように見える。三名雪の斜面にエアーマットを敷き、そうした彼らの行動を眺めていた。全く優雅なひとときだ。富山

湾が夕陽に紅く染まり魚津から能登半島にかけ浮かび上って見える。やがて夜の帳があり、ツェルトに入る。初日と本日の天気は良かったが、絹雲から絹層雪に変わっており、おそろしく明日は荒天だろうと話し合いながら就寝する。

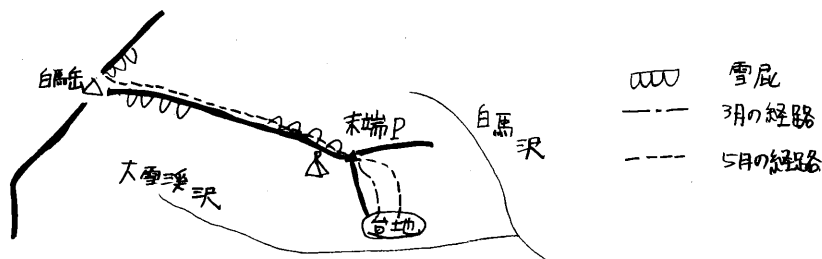
5月5日、午前2時起床、ツェルトから顔を出せば竟に反して満天の星空。朝食を済まし4時出発、山々はまだ静かに眠っており行動しているのは私達3名だけだ。薄氷が着いた天狗の大下りを下り、不帰工峰へ。ここからは唐松沢へ削ぎ落ちた不帰東面の壁が手に取るように見える。いつか、この壁を完登できることを夢みながら、ヘルメットを被り不帰Ⅱ・Ⅲ峰へ。不帰Ⅱ峰の登りは、主稜よりアイゼンテクニックを活かせる箇所だ。これまで六甲でおこなってきたトレーニングの成果をりかんなく発揮でき、ささやかであるが快適なリタイムを楽しんだ。

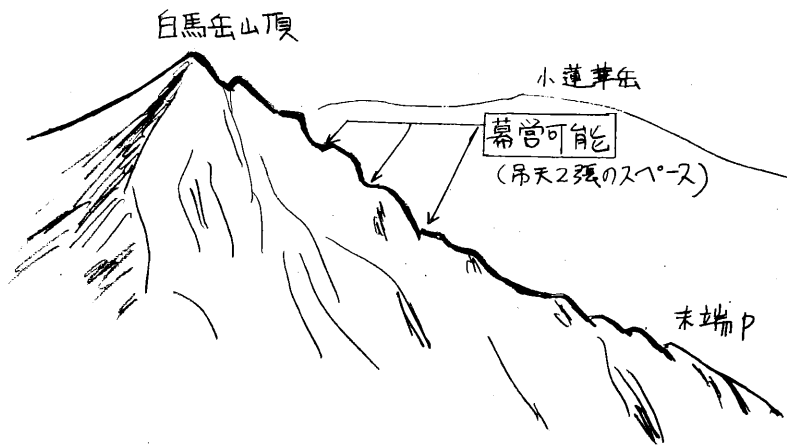
不帰Ⅰ峰、唐松岳を越えていよいよ当山行も最後、八方尾根を下る。八方尾根の上部付近は比較的雪があったが、オニケルン付近へ来ると雪も少なり。黒菱着8時30分。レストラン八方に入り、私は缶ビール、アルコール類が駄目な迫田、小林両氏は缶チューヌにてささやかな祝杯をあげる。

白馬岳主稜から白馬三山、不帰Ⅰ峰と通ってきた峰々がよく見える。入山の時の緊張感はなく、何ごとにも変化がたい満たされた一瞬だ。主稜の彼方には、この冬山合宿がおこなわれた天狗原、乗鞍岳が見える。冬山の様相はなく、所々に地肌がのぞいていた。また下をみれば、スキーの時いつもお世話になる私の母校の山の家がみえる。2月、スキーに来た時と比べ雪量も少なく、黒菱リフト周辺のみ何とかスキーが出来る程度だ。リーゼンコースをもるともせず、阜のごとく滑り降り八方の主W君は今何処に――。

春風のなかをリフト、ゴンドラと乗り継ぎ細野へ下る。今度、後立山へ来るのはいつのことだろう。その時はスキーだろうか、それとも不帰の壁を攀いでいるだろうか。いや鹿島の北壁かもしれない。

これから山は無雪期に入ろうとしている。新たなことに対してまた構想が湧いてくる。私の登山はいつたいつにならぬと終わりのだろうか――。





杓子岳付近よりの“主稜”

尾瀬ヶ原

幸内義孝

5月3日～5日 メンバー 幸内(単独)

今年の目標であった尾瀬, 片氏より聞いていた尾瀬で楽しみだった。一番の心配は, 東京から上野へどうやって行くのかだったが, 思う程難しくなかった。沼田に降りるとバスが待っていた。そのまま富士見下へ。朝食をとって次へ次へと進め, 至仏頂上に10時35分に着く。そのまま山の鼻より見晴(下田代十字路)へ14時30分着。尾瀬を初めて見たとき, 何と広いかとか/歩くときもし砂であれば砂漠のどまんなかという感じだった。自然と素晴らしく思えた。

翌朝, 6時に出発, 燧ヶ岳10時, リリ天気で昼寝をする。周りの風景は何と素晴らしく思う。尾瀬ヶ原, 尾瀬沼, 燧日光, 会津駒, 越後の山々, 遠く朝日連峰をも見えた。下りは又, ナイロンを敷いて尻セードで下山。だが人が多いのになちょっと幻滅だ。東電小屋よりの燧ヶ岳も素晴らしく思えた。今度は6月頃, 彼女と来てみたいと思ひ別れを告げ, 三平峠を越え大清水へ下山した。18時であった。本日は大清水泊りとする。

翌朝, 大清水より沼田へ。

奥秩父縦走

山本泰彦

S 54年4月27日～ 4月30日

メンバー：星野、山本

4月27日(雨後曇) 大阪(前夜22:20)——塩尻(4:40～5:42)——韭崎(7:55～8:50)——増富温泉(9:28)——瑞牆山荘(9:50～9:55)——富士見平小屋(10:25～13:15)——瑞牆山(14:10～14:15)——富士見平小屋(15:15～15:30)——大日小屋(16:10～16:25)——大日岩(16:50～16:55)——森林限界(18:05)——幕营地(18:30)

夜半から降り出した雨は、韭崎駅に着いてもやまない。「今日は増富温泉泊りが。」という星野君の期待を裏切って小雨になる。瑞牆山荘に問合せるとマイクロバスは、本日運休の由。奮発してタクシーの客となる。増富温泉まではメーターを倒すが(3700円)そこから先は貸切とのこと(2500円)。瑞牆山荘でタクシーを降りる頃には小雨となる。小屋の前から指導標に従って広い径を登る。「左膝が少し痛むなあ。」と僕がいうと、星野君いわく「ザックの"KAC"のワッペンが伊達についているのではないぞ。このワッペンをつけたら径では絶対追抜かれることなく、岩場では誰よりも速く攀るのだ。今までの伝統だ。抜かれたら許されへんぞ。」とハッパをかけられる。(今回の山行で伝統は守れてホッとした。)

富士見平小屋で雨宿りをする。2時間も至ったろうか。空も明るくなり、雨もあがったので空荷で瑞牆山へ向う。天鳥川を渡り、露岩の径をたどる。次々と巨岩が現われ、星野君を喜ばす。鞍部から稜線を左へ回り込むと露岩の頂上である。小雨と霧で眺望皆無。しかもゴミが散乱しており早々に退散する。往路を戻り岩で少し遊ぶ。天鳥川を過ぎたあたりから振り返れば、瑞牆山の西稜がいくつも岩峰を形成し、すばらしい景観をみせてくれた。さぞ紅葉の頃はと想像をかきたてる。「今度来る時は岩登りの道具が必要な。」と仰しゃるリーダーの言葉も首肯される。

富士見平小屋からゆったりした径を登り、少し下りになると大日小屋である。所々に岩峰が樹林から抜きでて息をのむ景観をつくっており、単調な歩きを慰めてくれる。大日小屋上部で小沢を渡り、縦ハ丁の急登となる。しかもこのあたりから、径には氷が張り歩きづらいが「樹林帯でアイゼンは不要」とリーダーは仰しゃる。大日岩は高距50mは充分にある立派な岩で、その基部をまわす。樹林のゆるい尾根にでて氷が雪にかある。右手少し径からはいった所から小豆島の杣指岳に似た岩峰を望む。ここを過ぎると再び急登と

なり、一登りて森林限界に蔽ひだす。強風が吹き、霧で視界がきかない。尾根の右側(山梨県側)はガレており、露岩の径は氷っているため、気を引締めて歩く。三個目の岩峰を越した所から上着に氷が着き始めたので防寒着を着る。あと少しで金峰山頂上と思うが無理をせず、稜線の左側に幕営地を求める。夕食のジンギス汗料理で満腹となり、夢路につく。

4月28日(晴後霧)幕営地(6:20)——金峰山(6:40~6:50)——朝日岳(7:40~7:45)——大弛(8:30~8:45)——北奥4丈岳(9:30~9:38)——国師岳(9:50~10:20)——2295m独標(11:10~11:15)——富士見台(14:10)——水師(15:00~15:05)——甲武信岳(15:50~16:00)——三宝山(16:30~16:33)——甲武信岳(17:03)——甲武信小屋(17:25)

昨日の天気がまるで嘘のよう、すっかり青空が広がり、すばらしい大観を提供してくれる。樹林を纏い堂々たる山容の小川山。その支尾根の端に岩晶をみせているのが瑞牆山。浅間山、ハケ岳連峰、なんと後立山までみえるではないか!! そこで一句?

雪上で ボンをしながら ハツを観る

尾根に出ると、富士山、南アルプスも見え、360度の大展望である。昨日は霧のため見えなかった五丈石も200m先にでんと構えている。鳳凰へ行く広澤、大下両嬢は、眼下の甲府盆地を列車にゆられているところだろうか。連中はついていいるなと思う。岩はベルグウがついているものの樹氷が美しい。金峰山を過ぎ餐ノ河原で僕がサングラスをつけると、星野君が「いよう、ジュールニスト!! 決っていますね。」とひやかす。縦走路はここで直角に右折し、鉄山の左山腹を巻き、少し下って、朝日岳へ急登する。振り返ると金峰山を信州側から登ってきた霧が一瞬のうちに包んでしまった。このあたりで僕がバテ気味なのでトッパをいくことにする。ペースメーカー 兼 地雪深し 兼 雪落としである。朝日岳から尾根を忠実にたどり、大弛に着く。ここは林道が横切っているが、積雪で自動車がはいっていないのがせめてもの慰めである。夏テントが二張、テントの外に放り出してあるのは二重靴。朝から酒盛りかにぎやかである。

国師への径傍には、遭難碑が次々と建っている。メメ大学Wレ部享年19才のパターンである。前国師から少し下り、北奥4丈岳への径を別ける。株父の最高峰に敬意を表し、頂上を踏ませていただく。霧のなかゆえ眺望きかず、往路を戻り、国師へ登る。一等三角点に雪から頭をのぞかせている。少し霧がはれて、北奥4丈岳だけがみえる。国師から甲武信岳への縦走路は、トレ

ールもなく慎重に歩く。国師から東へ最初のコブを越したところで、指導標と赤布に導かれ、左へ直角に折れ、急斜面を下るが、すぐに甲武信岳への尾根に乗る。最低鞍部までは急降下を続け、そこからダラダラした登り下りとなりコブをいくつも越える。霧の中の樹林を行くといえ、ロマンティックに聞えるが、野郎二人、タコツボを造りながらでは寂れるばかりである。東様を過ぎたあたりで甲武信岳からの登山者に出会う。今日初めて人間である。

富士見台を過ぎて直角に右へ折れ急降下し、水師へ登り返す。水師から下りした鞍部で梓山からの径をあわせ、露岩のある甲武信岳へ着く。天候：霧、視界：10m。頂上にザックを置き、三宝山（一等三角点）へ往復する。甲武信岳から凍てついた急坂を下り、木賊山との鞍部にある甲武信小屋の前で幕営する。

4月29日(晴) 甲武信小屋(7:05)―木賊山(7:20~7:25)―笹平(8:00~8:05)―破不山(8:40~8:50)―東破不山(9:10)―雁坂嶺(9:55~10:10)―雁坂峠(10:35~10:40)―水晶山(11:18)―雁峠(12:30~12:50)―笠取小屋(13:15~13:20)―将監峠(15:30)―将監小屋(15:35~15:50)―大ダル(17:50)

星野君は歩きだけの山では気合がはいらないのか、今日も遅い出発となる。木賊山頂上午前のかれで展望が開け、金峰、国師、甲武信、三宝と昨日踏んだ頂上が見られる。樹氷が太陽の日射しをあびて木から離れ、風が吹くと吹雪のように頭上から襲いかかる。木賊山から下りにかかると、乱杭岳の尾根を持つ両神山が左手にみえてくる。前方の破不山は笹平から標高差200m余であるが、立派な山容である。笹平には新しい避難小屋がある。ここで大日小屋以来久方ぶりに土を踏む、破不山へは岩径で、ゆるくな。て右へ折れると頂上である。東破不山への尾根には休憩適地が多くあり、富士山、大菩薩嶺を眺めながら、先行者をゴボウ抜きして行く。東破不の下りで星野君が華麗なグリセードを披露する。雁坂嶺へのゆるい登りで腐った雪に足をとられ消耗する。融雪が始ったばかりの急坂を下り、熊笹が美しい雁坂峠に着く。春の日射しをあび、登山者が三々五々休憩している。水晶山の登りに残雪があり、ロングスパッツをはずしたことを後悔する。古礼山は左を巻き、軽い登り下りの後、笹の斜面を下ると、広々とした笹原の雁峠である。ここで大休止し、濡れたものを乾かす。笹の道をたどると突然、軽四輪車の通れそうな道に出会う。これを右へとり、どんどん下ると笠取小屋に着く。甲州側から良い登山道があるのか、小屋には二輪車がある。ここは水場もあり、よき幕営地である。

縦走路は尾根の右側の水平トラバース径となる。横切る沢ごとに水が得られ、手入れのいきとどいた中広い径と良い天候はピクニック気分させる。登り下りのない径に好い加減うんざりした頃、将監峠に着く。峠の少し手前は、ゴルフができそうな低い笹原が広がっている。峠から南へ100mも下ると、将監小屋がある。(縦走を続けるならば将監小屋へ立寄るのは時間のロスである。)ここから急登して先程下った分を登り返す。実際の小屋の位置は、地形図より、もっと下方である。大常木谷源頭で水をとり、大常木山と飛龍山との鞍部、通称大ダレで幕営する。

4月30日(雨後曇)大ダレ(6:50)―先岩(7:30)―飛龍山(7:40)―先岩(7:50)―飛龍権現(7:55~9:05)―北天のタル(9:42)―狼平(10:45)―三条ダレミ(11:15~11:20)―雲取山(11:50~12:00)―奥多摩小屋(12:30)―鴨沢分岐(12:45~13:00)―鴨沢(14:48~14:55)―留浦(15:03~15:08)―奥多摩駅(15:50)―立川―東京―神戸

フライトをたたく雨の音で目をさます。停滞するか雲取山を越えて下ってしまうか躊躇するも、出発することにする。残雪が氷化しているので歩きづらい。先岩でザックをおき、飛龍山を往復する。飛龍権現で信心深い僕が雨止みの祈願を念入りに行う。(飛龍権現は雨をいではないのか?)雲取



山方面からの登山者が増え、礼儀正しい我々は、常に径を譲る。縦走を終ようとしている者の余裕であるのか。このトラバース径はよく手入れされていて、栈道は所々真新しい。想えば雁峠からずっとトラバース径ばかりではないか。何故、稜線を通さないのか？二人で不平をいいつつ、ひたすら歩く。狼平であたりが明るくなったかと思うと雨も止み、ゆるやかな道を三糸ダルミに着く。雲取頂上の笹原がみえる。“雲取頂上まで50分”の指導標があるのを見て、星野君は「30分で行かんと、トレーニング不足やで。」と仰しゃる。今回の山行の最後の登りだ、頑張ろう。一等三角点の鎮座する頂上へは29分で着いた。“コングラチュレーション、奥秩父縦走完了。”金属製の立派な方位盤があり、晴れていればと思うが霧の中ではせん方なし。これは飛龍権現でお祈りをしなかった星野君の不信心のせいだろうか？雨が降り始めたので早々に下ることにする。登山道が四通八通しているので分岐毎に急入りにチェックする。奥多摩小屋を過ぎるころから太陽がのぞきだした。巾広いビクニツクコースを歩くのはもううんざりしたので、鴨沢へ下ることにする。鴨沢への下り道は支尾根の山腹をまくまことにゆったりした道であるが、関東ローム層とやらで足元で壁土をぬけている感じで、靴も靴下も泥だらけとなる。人里近くなると、路傍に実のひとつだになき山吹が咲き乱れ、多摩湖を渡る五月のさわやかな風は、頗る気持ちよかった。

鳳凰三山縦走

大下澄子

昭和54年4月27日～30日

メンバー：広沢、大下

28日：夜叉神荘(10:05)——夜叉神峠(11:15)——杖立峠(12:05)——毎平(15:35)——南御室小屋(16:05)——薬師岳小屋(18:00)。

29日：薬師岳小屋(6:55)——薬師岳(7:00)——観音岳(8:00)——赤坂沢ノ頭(10:10)——鳳凰小屋(11:35)——燕頭山(14:20)——御座石鉱泉(16:05)。

電車の窓から見ていると、南アルプスの上部には予想外に雪がついていて美しい。いかにも南アルプス的な夜叉神峠から南御室小屋までずっとガスの中。かなり雪がついているように思う。南御室小屋に着いた頃から時々青空が見え始め、薬師岳への登りの途中休憩した所で北岳の方角をずっと見ていると、時々ガスの間から真っ白な北岳が見えてあまりの大きさにぞっとする。長いこと休む。すると、雲が流れていて不思議な天候で、北岳倒(西)に雲

が早く、東側にかなうガスがまいていて西側から太陽があたり、ガスの中に円形の虹が出来ていた。もう少し葉野岳へ登り始めると視界が広がった。北岳から、富士山までものすごい雲海の上に浮かんでいた。夜は風がきついで、みごちな星望。

朝は、ぼんやりとした天候。ライゼンをつつて葉野、観音と登る。南アルプス（南部）の方の山々に雪がバツとりと確実についている。それぞれの山についている雪の質が違っているし、どこか黄色く見えた雪もあった。下の方の町も見える。ふと下界を思う。別世界を感じる。オベリスクも近くで見ると美しい。ゆっくりと眺めながら下りる。天候にめぐまれた満足のいく山行であったように思う。

鹿島槍、爺ヶ岳 健走

国沢記

メニバー：萩本、国沢、大下

5月3日 晴

信濃大町＝大谷原（9:20）—西俣出谷（10:10）—高千穂平（15:50）

気象庁の天気予報はみごとはずれて、5月連休は、絶好の登山日和如りでした。紺碧の空と白銀の後立山連峰が、信濃大町駅に着いた私達を迎えてくれる。雪山を眺めるのは、2月の仙丈岳以来なので、とても懐かしく夜行の疲れも吹っ飛んで何だか力が湧いてくる。大谷原までタクシーで入る。西俣出谷までは、大した高低も無くすべに着いたが、春の陽ざしは暖かくもう額に汗が滲む。水の補給をして、いよいよ赤岩尾根の登りである。この辺りかと雪道となる。取付きは尾根の末端からなのに、北俣本谷を登ってしまいい元に戻るまで時間的ロスは大きかったけれど、カモミカをみつけたりして結構楽しかった。赤岩尾根は樹林帯の急登で展望もなく苦しいの一言につきだが、道はしつかりトレスされていて歩きやすかった。午前中のお散歩がたたって高千穂平泊りとなってしまったが、ここは樹林も切れて絶好の展望台である。北俣本谷を隔てて、真っ白な鹿島槍がすばらしい。越中側に没んだ太陽を受けて、稜線の雪庇が透けてみえ美しいと思うと同時に恐怖を感じた。

5月4日 晴

高千穂平（4:20）—冷池小屋（6:15）—鹿島南山峰（8:10）—北峰（9:00）—冷池小屋（12:00）—爺ヶ岳南峰（15:30）—南沢（17:00）

ヘッドランプをつけて出発。今日も晴れそうなお天気である。布引尾根の

急斜面の小台地で明りがみえる。ビバークをしているのであろうか。どの尾根も急峻で人間が登れるとは思えない。最初のピークに着いた頃、朝日が鹿島槍を赤く染め始めた。何ともいえない感動がこみあげてくる。二、三のピークを越え、冷乗越に向ってトラバースする。ルート中、最も危険な場所である。早朝で雪の状態も良く難なく無事通過。乗越で雪の剣と御対面。冷池小屋から空身で鹿島槍往復。途中、いたる所で雷鳥達が楽しげに愛を語り合っている。春ぞうねえなんて話しながら登っているともう南峰到着。展望は、いうまでもなく最高。ほとんど無風状態で、34米に近いピークにいるとは思えないほど暖くのだ。ここで見知らぬ女性から声をかけられよく聞いてみると私の友人のそのまた友人で大村さんといい、入山前に私の友人から私達も鹿島槍に行くことを聞いていたらしい。関西弁の3人連れの女性をみかけたら声をかけようと思っていたとのこと。お互い会うのは初めてなのに、あぐに打ちとりて話が弾む。南峰から北峰は意外と時間がかかった。頂上は荷物にもアイゼンを付けないと滑り落ちそうな位狭い。北壁は恐る恐るのぞいてみたが、上部とカクネ里のみえるだけで核心部の岩壁は全く見えなかった。再び南峰へ。スキーを持って登って来たパーティーに出会った。牛首尾根の方へ滑るらしいが、頂上から滑ろうというのだからすごい。お手並みを拝見しようとししばらく待ってみたが、私達がいる間には滑っていただけませんでした。冷池小屋へ下る途中、雪庇の上にいる人達をみかけ、危いなと思ってみていた所、実は下降していたことが解る。雪庇を切って上にいる人間が下に出て来るのをみたのは、これが初めてで興味深かった。冷池小屋お昼到着。時間的にみても今日中に扇沢下山は可能ということに意見がまとまる。爺岳南峰へは、越中側をだらだらと一直線に横切っていく。ここで大村さんと再会を約してお別れ。彼女は冷池小屋に泊るという。私達は南後を直接下ることにする。扇沢までの時間ほどだったが、実に長く感じられた。それにしても夜明けから日没まで歩き通した1日だった。今日もまた恵まれすぎた山行に終わったようである。

白山 (2702.2 M)

山本泰彦

S 54年5月26～27日

メンバー：星野、田中、山本

5月26日(晴のち曇) 大阪(前夜23:20)―金沢(5:00)―市ノ瀬(6:15～6:25)―列当出合(7:20～7:40)―林道と出合う

(8:10~8:20)―登山道に出る(9:15~9:25)―甚ノ助ヒュッテ(9:50~10:35)―南竜ヶ馬場分岐(10:50)―昼寝(11:15~11:50)―黒ボコ岩(12:05~12:25)―室堂(12:50~13:05)―白山御前峰(13:55~14:15)―室堂(14:30~14:45)―南竜ヶ馬場(15:15)

金沢駅からタクシーに乗る。「別当出合ですよ。」とタクシーを降りられ(タクシー代:8000円)おぼけ眼で現在位置を確認しようとあたりをみまわすと、永井旅館、登山センターがあり、「川」の左岸にいないか!!ここは市ノ瀬である。別当出合まで6km林道を歩くのかと思うとうんざりして、夜行の疲れがどっとでてふらふら歩き始める。朝食を取っていると、軽四輪自動車が通りかかったので便乗をお願いして、別当出合まで送ってもらう。別当出合から川に下り、立派な鉄橋を渡り、別当谷と甚ノ助谷の中間尾根をいく。登山道は遊歩道という方がぴったりするくらい立派な道である。林道を横切り、再び林道と出合いそれをたどる。砂防工事小屋前的大木を利用した粹な水場で喉を潤す。柳谷にかかる不動滝が興を添えている。ここからうっかりして甚ノ助谷の方にはいってしまい、すぐ間違いに気がついたが面倒なのでそのまま踏跡をたどり、踏跡があやしくなった地点から左の尾根をめざして登ると、登山道があらわれたのでそれをいく。甚ノ助ヒュッテ付近は雪原状を呈し、小屋の尾根がやっと雪から顔を出したところである。さ、そくそのトタン尾根の上で星野君が昼寝をする。ここからみる別山は、雪鎧を纏い、危大な山容で迫ってくる。急登後、南竜ヶ馬場への径を右に分ける地点から左へどんどんトラバースする。50m程急登して観光新道と合流した地点が黒ボコ岩で露岩があり、その一つにレリーフが嵌め込まれている。ここから白山頂上が初めて望まれる。標高差わずか350mのためか迫力は全くない。だだっ広い弥陀ヶ原を横切って室堂に着く。軒先まで雪に埋れている室堂センターをまわりこみ、高天原で昼寝をし、奥社の鎮座する頂上に着く。頂上付近だけは残雪もなく、一等三角点がむきだしになっている。先刻、山稜にかかっていたレンズ雲の影響が早くも現れたのか、霰が舞い始める。雷鳴が響いたので、早々に頂上をあとにし、ぐっと雪に覆われた斜面を南竜ヶ馬場へ下る。

5月27日(小雨、霧のち曇)南竜ヶ馬場(8:50)―高天原(10:20)―室堂(10:30~11:00)―大倉尾根避難小屋(11:50)―大目川ダム(12:40)―平瀬

夜来の雷と雪も暁方には霰まじりのみぞれとなる。天気回復を待つが霽

は全く晴れない。みぞれが小雨にかあったところで、予定を変更し大倉尾根を下山路に選ぶ。霧と新雪のため、大倉尾根への取付がわからず、高天原まで登ってしまい、室堂へ下り直す。ここから宿舎御前荘の左側を水平トラバースし、大倉尾根に出る。避難小屋付近で残雪もなくなり、白水湖目指してどんどん下る。山頂付近と違い、ダム付近では青空がのぞいていて、初夏の風がとおりすぎていった。

穂高縦走

国沢記

メンバー：国沢、木下、深見

7月20日 岳沢登山口(7:45)ー岳沢ヒュッテ(9:40)ー前穂(14:00)ー奥穂(16:30)ー白出コル(17:10)

梅雨明けを期待していたのに、お天気は今一つはっきりしない様子である。けれど上高地に着いてみると穂高がその男性的な姿をみせてくれている。バスターミナル横の広場で身仕度を整え、計画書を提出して出発する。岳沢登山口から樹林帯の静かな道を登って行くと、ガラの場の末端がみえてきた。河童橋からみた岳沢はとても急斜面にみえたのに、ここまで来るとなだらかな感じがして、沢をふちどりするようにお花畑が美しい。岳沢ヒュッテへはあと一息である。ヒュッテから重太郎新道を登る。けっこうきつい登りで、夜行の疲れが足が重い。アルプスの涼風とお花畑に励まされて、前穂と奥穂の分岐点に到着。奥穂とそれに続く西穂への稜線が手の届きそうな所にみえる。前穂に着いた頃、ガスが出始め吊尾根を至て奥穂まで、ほとんど展望もなく白出のコルに下る。コルには、意外なほど雪が残っていた。

7月21日 白出コル(6:00)ー奥穂(6:35)ー天狗コル(9:15)ー西穂(13:35)ー田代橋(17:35)

前夜から雨が降り続いていたので、縦走を諦めて涸沢へ下るつもりでいた。4時頃テントから出てみると、常念岳からお日様が顔をのぞかせている。慌てて飛び起き出発の準備にかかる。十分な睡眠と好天気に足とりも軽く奥穂頂上へ。山頂では360度の展望に大満足。ジャングルムが呼んでいるようだ。とにかく痩せた岩稜帯なので慎重に歩く。ホールトイやスタンスがいっぱいあるので高度感の割には、それほど恐怖心は湧かなかった。ジャンでは先を歩いていったち人組の男性達が、荷物を置いて登り始めたので、随分迷ったけれど荷物を背おったまま登る。上に着くと例の男性達が了然としてみている。ほんの数分の登りだったけれど、とても緊張したしやはり恐かった。

ジャンからは緩やかな岩尾根をペンキ印に従って、天狗のユルまで下る。天狗岩を至て間ノ岳へ。そして小ピークをいくつか越え西麓に到着。この間、岩がもろく浮石が多いので、落石の音が岩間に響いて何とも不気味だったし、緊張の連続だった。西麓では、午後から出始めたガスのせいで、期待の展望を楽しむことが出来ず残念だった。独標で、釜トンネルが環境庁のお達示でク時閉鎖と聞き、小雨降る中猛スピードで上高地へ下った。梅雨の時期にしては天候に恵まれ、無事下山出来たものの、雨がもう少し早く降り始めていたら岩稜帯の通過は難しかったのではないかと思います。今応えのある縦走でした。

明神主峰東稜～曇岩中央ルンゼ

星野辰也

メンバー：内藤①、内藤②、幸内、星野

昭和54年7月20日～22日

7月20日 上高地(7:00)―明神池(8:15)―宮川ユル(9:30)
―ひょうたん池(10:35～11:05)―ラクダのユル(12:45～13:30)―明神主峰(15:20～15:40)―岳沢
(18:20)

今年は梅明が遅れ、穂高も我々の入山前日までは雨だったようだ。しかし今回は3日間ともまあまあな天候で予定通りの山行が出来たのでここに報告したい。

早朝、上高地より梓川の右岸を明神池目指して歩く。途中岳沢出合までは穂高縦走の女性軍と同行する。明神へは養魚場より明確な道をほぼ一直線にひょうたん池へと登る。池までは約800mの登りで左に明神五峰の赤壁、中央リンネが圧倒的にそそり立っている。上高地よりの距離の近さにもかかわらず穂高のメインルートでない為に静かな山行が出来るところだ。ひょうたん池は長手方向が10m程の小さな池である。池からいよいよ主稜の登りにかかる。ラクダのユルまでは、積雪期のフィックスがところどころあるものの容易な尾根の登りである。ラクダのユルにて内藤①―星野、内藤②―幸内のオーダーでザイルを結び、登攀を開始する。東稜バットレスはザイルピッチで7P(250m)、Ⅱ級の岩稜である。1ピッチは左側のバンドをトラバースレガリーに入る。2ピッチ目は草付のガリーを20m程登ると大テラスに出て、ユンテで20m。3ピッチは快適なスラブ状の凹角を登る。残置ハーケンはいかりしている。4ピッチは容易な凹状のところを右方へと

登り左側のハングした岩の下を右へ廻り込んで斜状のテラスに出て、ビレーピンを2本打つ。ここより正面壁下のスラブを左へトラバースし脆い壁を登る。6ピッチは鋭い岩稜であるが、ホールドが豊富でルートは自由にとれる。7ピッチは岩稜を左より廻り込んで主峰へ出る。主峰で一服して最低ユルよりガラガラのザレ場の大明神沢を下降する。下部は急峻な雪溪で、ピッケルはもちろんアイゼンもないのでスタカットで慎重にシュルンドの中を下降する。途中重太郎新道の登山者に遭難者と思われ救助隊の要否を問われたのには苦笑した。しかし二俣から雪溪もゆるくなりグリセードで一気に下降する。岳沢のラント場に着き今日一日の長かった行動を終える。

7月21日 岳沢(8:00) — 取付(9:45~10:00) — 縦走路(14:40) — 天狗のゴル(15:15) — 岳沢(17:35)

夜半はらった雨もあがり、今日の目標壘岩へ向う。天狗沢は下部はガラ場で、上部にはかなりの残雪がある。中央ルンゼはピナクルの右下を壘岩尾根へ突きあげているルンゼで、取付は急な雪溪を避け右の岩場から登攀を開始する。岩は堅く50m程登りルンゼに入る。ルンゼを100m程コンテで登る。ピナクル直下はツルツルの滝でルートは左のスラブにとりピナクル直下で再びルンゼに戻る。次にガレた草付を左岸へトラバースし、スラブ状の岩場を右方へ40m、次に階段状の岩場を30m登るとリスのまったくないスラブに出る。確実なビレー点がないのにはまいった。次はかなり難しく、ハーケンを2本打つ。再びスラブに出ると快適な大テラスがあり、ここで一服する。ほぼ中間地点だ。奥壁の眺めもよい。大テラスより草付を150mコンテで登り、リッジを2ピッチ登ると再びルンゼに戻る。ルンゼ内を50m程コンテで登ると雪溪となり、左側を20m登り次にシュルンドに入り、難しいフリーと雪溪登りで壘岩尾根のユルへ出る。ゴルより脆い壁を1ピッチ登りハイ松帯に入りビレーする。ここに700mあまりの登攀を終える。あとは縦走路より天狗のゴルへ、ゴルよりの下降は急な雪溪でステップはあるものの慎重にザイルでビレーして下降する。ノーザイルで下降中の人はいたが危険なことである。雪溪の下のカレ場に着くと食料袋や破れたザックや壊れたラジカセが放置してあった。岳沢ヒュッテの人の話では、ザックの主は滑落したそうで、他にも多数天狗沢で事故を起こしているらしい。

7月22日 岳沢(7:15) — 上高地(8:35) — 帰神

静かなる登攀を終え、足取り軽く上高地へと下山する。

荒島岳

幸内義孝

昭和54年5月30日 メンバー 幸内、田中

5月30日 大阪(前夜) — 福井 — 下唯野(7:15) — 大野登山小屋(8:00) — 小荒島岳(10:25) — 荒島岳(11:40 ~ 12:30) — まぼろし大垂(14:00) — 越前下山駅(16:30)

5月29日夜より雨が降り出した。30日も雨の土砂降りの中を中出より登り始める。道はぼろぼろで、きりしてゐる。頂上迄ではあるが傘をさしていても廻りの笹でビショビショ。頂上の小屋で昼食を取ることにしたが、寒くて寒くてじっとしてゐない。

昼食後、地図を頼りに下山する。道は踏み跡程度で、それに笹で滑りやすく、何度も転びながら谷迄下る。もう少しで谷底の時、右手に大滝が見え、両方がよく切れ落ちて、慎重に下る。道を迷わないよう注意しよう。それから2000米の直登をして尾根へ、それからタンタンとした下りで、何なく駅に着く。ゴミのない山と会ふことがなかった久しぶりの山であった。

梅雨の穂高

—— 岩と雪を求めて ——

植原清明

入梅とともに雨に洗われた木々の緑が鮮やかさを増してくる。6月、月1回のアルプス行(実際は4月にはおこなっていた)を実現すべく、6月24、25、(26)日の予定でプランニングにとりかかる。行先は穂高岳北尾根を最大課題とし、よくよく天気が悪ければ上高地散策という5つのプランを考え、大阪駅よりちくま5号に乗り込む。

土曜日の夜行のためか、それともスキーと山との中間的な時期のためか。列車は空いており、1ボックスを私独りで占領、たちまちプランニングルームに早変わりとなる。岩場のガイドブックを読んでいるうち、家でのプラン以上のことが浮んでくる。折角穂高へ行くのに岩登りをやりたい。前穂東壁はⅢ級前後だ、ここなら独りでも攀じれるのではないだろうか。それとも上高地か壺沢にてパートナーをみつけて屏風岩をアタックしようか。いや今は梅雨時だ。私にとっては梅雨のアルプスは始めてだ。北尾根どころか、壺沢へ行けるだけでも良ししなければ……。など、様々な想いを巡らせながら眼りに

つく。

眼が覚めれば塩尻だった。身仕度を整え松本で下車、ここで松本電鉄へ乗り換え新島々へ、さらにバスに乗り換え上高地へ向う。シーズン中、特に連休などにひっかかると登山の数倍のエネルギーをこの乗物の乗り換えに使うのだが、今ではバスも空いており梓川のせせらぎを聞きながら数年ぶりで会える穂高の峰々に想いをよせる。

釜トンネルを抜け、焼岳、大正池を過ぎると眼前に前穂、奥穂、吊尾根を中心に穂高の峰々がみえてくる。私が最初、高校2年の時、H君とともに穂高に憧れ上高地を訪れた時との印象と全く変らない姿で眼前に迫ってくる。その時の印象は、書物などで上高地から写した穂高の峰々がよく紹介されているが、その写真とは全く違った印象があった。吊尾根が想像していたよりも短く、前穂、奥穂の峻険さに驚かされたものである。

やがてバスはターミナルへ、そこでTシャツ、短パンに着換え、8時30分出発、涸沢を目指す。小梨平付近は多くのキャビンが立ち並び道も迷路のようになっている。若干道を間違えたが、無事本道に戻る。明神池入口を素通りし、明神岳を眺めながら涸沢へ、そこで休憩の後、横尾へ向う。横尾にてビールを買い昼食とも何とモッかなり食事をしていると、背後から人の気配を感じ振り返ると大下、野島嶮が居た。彼等達は、涸沢へ行っての帰りということであった。

横尾からは前穂の東壁と屏風岩が同時に眺められる。ここから眺めると屏風岩は岩としての迫力、魅力はあるが、やはり前穂北尾根の末端に過ぎないという感拭い去ることはできない。岩登りという観点から見れば、もちろん屏風岩は素晴らしいものがあるだろうが……。

横尾を後に涸沢へ向う。涸沢への路、それは私にとっては試練の路とそういうべきものである。それほどきつい登りはないのだが、やけに疲れる路である。この路の印象はバテたことしかない。しかし、その当時と比べ私も山慣れてきている。今回は、それほどバテずに涸沢へ辿り着くことができるだろうか。屏風岩を仰ぎながら岩小屋を過ぎ横尾谷左岸の路を進むと迂回路の標式があった。本谷橋を渡るまでは左岸のはずなのに。しかし、私が穂高へ来るのは6、7年ぶりだ。路も右岸に変わったのではないだろうかとそちらの路へ入ることにする。やがて屏風岩2ルンゼ付近まで来ると倒木が著しく行手を遮る。仕方なく横尾谷の河原へ下り前進するがそれも困難となる。左岸に出て、横尾谷へおりているガリーを登り、左岸路へ戻ろうかと考えたが、適当な渡渉箇所をみつからない。しかたなく来た路を引き返し、左岸路を登る

とやがて本谷橋へ着いた。ここまではそれほど疲れを感じずにこいた。ここより路は右岸に変わるのだ。ここからが本格的な地獄の階段となる。歩荷の遅々たるペースで歩を進めるが、急にピッチが落ちたようだ。疲れもでてきていることは確かだが、それよりもこの路は全く風が無いのである。ムッとした熱気だけである。それでもスローペースで進むと涸沢ヒュッテが見えてき、雪溪の末端に着いた。ここからヒュッテまでは5分程で着きそうなのだが、意外と時間がかかるものである。ヘルメットを被り、ピッケルを手にモレーンでできた丸山の上に建つ涸沢ヒュッテを目指し、ゆっくりゆっくり登る。やがて狭い涸沢の谷も開けカーン状になり16時ヒュッテに着いた。

涸沢ヒュッテには人の気配はなく、風が通り過ぎ用戸がガタンと時々音をたて開いたり、閉じたりしており、ゴーストタウンさながらの様相を呈していた。荷物をおろし、これからどうしようかと考えていると、何人かの登山者がやってきた。ここで飯を食いⅤ・Ⅵのユルへ少々遅くなくても向うか否か。しかし、小屋は空いている模様。何もそこまでしてそんな苦勞をする必要がないではないか。いしぶんバテ気味であるし、それに他の登山者と知り合い山の話ができるかもしれない。特にT氏(?)とおもゆゆし人がヒュッテに泊る模様。決めた!早速ヒュッテへ。

ヒュッテ内は空いており、夕食、就寝全て山にしては贅沢だった。夕食中T氏(?)に山について様々なことを尋ねるが余り良い返事は得られなかった。

翌朝、新調のクレッターシューズを履き、7時過ぎヒュッテを出発、Ⅴ・Ⅵのユルへ向う。前穂沢には誰一人おらず、キックステップにてツグツグに登る。雪溪上には大きな岩があちこちこころがっており、いつ何どきそれらが滑り落ちてくるとも限らない。特に雪溪上では音もなしに落ちてくるのである。常に上部を気にしながら、ステップを心地よく刻みながら快適に進む。やがてⅤ・Ⅵのユルへ。

このユルからは、上高地側、涸沢側が一望できる。昨日通ってきた穂沢、横尾、梓川がまるで箱庭をみるように眺められる。涸沢には人の姿はなく、広いカーンを埋めつくしている雪、這松の緑、時々思い出したかのように湧きたつ雲、全てが崇高そのものである。

Ⅴ・Ⅵのユルから、半分雪に埋れまじりぬ奥又白の池を左手にみながら、Ⅶ峰を越えⅣ峰へ。Ⅳ峰の登りのガリーで踏み誤り、大きな落石を涸沢側へおこしてしまった。ちょっとしたミスが次々と岩を誘発し、かなりの落石となった。幸い人はいなかった(?)模様であるが、シーズン中であれ

ば用心しなければ。このような人工落石によって事故もかなりあるときく。

IV峰からは北尾根の核心部ともいえるべきIII峰が望まれる。奥又側はがすっており、山頂部に雪を被った前穂の頂（I峰）がガスの切れ間に時々顔を表わす。I峰はIII峰の陰になってみえないかとおもっていたが、山頂部のガスが切れた時、顔をのぞかせたI峰の姿は何とも形容しがたいスケールを感じさせた。それは人間の微小たる力では、とても動じえないとてつもない巨大な白鯨のようであった。III峰の登りはさ程難しそうな感じではない。しかし、岩というものは眺めるだけと実際に攀じてみるとでは大変違うものだ。眺めていて易しように感じた所が実際は難しく、また逆に眺めていて難しように見える所が実際は易しりといったことがよくあるものだ。

とりあえず取り付いてみようとしてIII・IVのコルへ。コルより踏跡らしきものを巡って行けば、垂壁にぶかった。この壁には大きなハーケンが半分ほど打ち込んであり、それに太いが幾分老朽化したシュリングがぶらさがっている。それを騙しながらつかんでレックに達した。これより先にはハーケンから本程入っており、セルフビレーなしでも攀じれそうな感じであるため掛んでみたが、幾分手ごめそう。その時、ヘリコプターの轟音が耳をつんざく。その轟音の発生地点は奥穂と掴取岳のコルに建つ穂高岳山荘の地点だ。振り向いてみると物資をぶささげて飛び立とうとしていた。そのヘリコプターとともに“遭難”のことが脳裏を過ぎ去っていく。ここから少しでもミスをするればIII・IVのコルか掴取へ、岩角に肉体は粉碎される人間としての原形をとどめずに落ちていくだろう。早速、狭いレックでザックを肩からはずし、なかに入っている小袋入の小物をハーケンに結めえ、登攀具を身につける。40mのガイルを二重にしてゼルアストに取り付けカラビナにセットする。ハーケンは錆びているがよく効いている。このレックからIII・IVのコルまで20m以上あるだろうか。20m以下なら転落すればIII・IVのコルへたきつけられるであろう。それに20mいっぱい転落したとしたらハーケンはその衝撃に耐えることが出来るだろうか。しかし、ノーガイルと比べ数%の確率で助かる可能性はある。私はその数%に賭けてみたい。準備を整え登攀を開始する。クレッターシューズが岩肌にフィットし、何ともいえない快適さで高みへ登っていく。想像していたよりも易しく、10m程でこの難関を突破した。そこによく効いたハーケンがあり、それにシュリング、カラビナ、ガイルをセットし、ガイルにつたってレックへ下降。荷物をまとめ、アルーツツワにてガイルのセット地点へ登る。ここからは、まだ難場がありそうなので、登攀具をさびにガイルをつけたまま登ることにする。登攀の調子がまずま

す出てきた。適当な壁をみつ けながら、次々と調子づいて高みへ高みへと登っていき、いつのまにかⅡ峰を越えⅢ峰の頂にきていた。Ⅰ峰(前穂山頂)には2人の登山者の人影がみえる。

Ⅲ峰を下降しⅠ峰へ昼頃着いた。2人の人影は北ア救助隊の方(1人は学生風の方であったが)であった。これから岳沢の登山路の整備に向うとか。一袋の夏蜜柑をよばれ、ご苦労様と心のなかで挨拶をかわり、彼らは岳沢へ下って行かれた。独り山頂に佇み流れゆく雲を1時間近く眺めていた。大キレット辺りから湧きたつ雲によって梶ヶ岳は見えな が、季節の移り変わりを感 じさせられた。間もなく夏山シーズンがやって来る。穂高は多くの登山者で賑うことであらう。この静寂さもあると僅かである。

前穂山頂を後に吊尾根を少し下り、前穂直下の苔むした壁を下る。雨が降って来 たが、苔が水分を吸収してくれ、スリッパの危険性は少ない。途中ナイフで割かれたカリマーのザックが落ちており、盗賊にでも襲われたのだらうかと苦笑した。壁から雪溪に落ちる。途中にクレバスガロを開けて獲物を待っている。スリッパでもしょうものならたまに雪溪の餌食になってしまうであらう。ピッケルを納得のいくま で雪面に差し込み、一步一步確実にキックステップで下る。クレバスは靴幅ほどつながった箇所があり、そこから下の雪溪へ移ることができた。後は廻沢ヒュッテまで広大な雪溪が広がっている。グリセート、キックステップで雪の感触を楽しみながら15時ヒュッテについた。

早速ビールにて一人で祝杯をあげるが、何故か味気なかった。明日はどうしょうか。天気は悪く、何とも見えな い。それに仕事(休暇)のことも考えねばならな い。ヒュッテのべランダにて屏風の頭を眺めながら愚案した。丁度し(？)に「明日晴れば屏風をやりませんか？」と打診したが、あっさり振られてしまった。屏風はまたの機会にアタックすることにし、とりあえず下山することにす る。

夕暮れの雨のなかを横尾を目指して下る。雨にけえる屏風岩を眺めながらそ未練は残る。横尾で一泊して試登してみようかなど、考えながら歩を進めてい ると1つの間にか横尾に着いていた。横尾でビールを買い、せめてものヤケ酒とする。それと、今後のために石岡繁雄著「屏風岩登攀記」を買った。横尾を過ぎると屏風岩ともお別れだ。後髪を引かれながら、後は上高地バスターミナルへ下るのみである。穂沢でカレーとラーメンの夕食、明神でコーヒーと、山にしては贅沢三昧を尽くして、真暗な誰もしな い上高地の道をヘッドランパの光を頼りに淡々と下る。ただ梓川のせせらぎだけが私に話

りかけてくれる。21時過ぎバスターミナルへ着いた。タクシーをお願いしたが、本日はもう無理とのこと。それとともに、本日の夜行に乗りなくてもよきと行った安堵感が湧いてきた。別に仕事が好きというわけでもない。仕事は仕事なりに楽しめ、それによって人格形成にも役立っているであろうが、それ以上に山の魅力の方が大きりののである。それに、無理してまであくせく働く必要はないではないか。現代社会をガゼルシャフトとするなら、そうした無理はかえってマイナスとなることさえあるのではないだろうか。まあ、とりあえず村営ホテルに落ち着いた。ベッドに横になり手足を伸ばすと、昨日、今日のことを、懐しく甦えてくる。

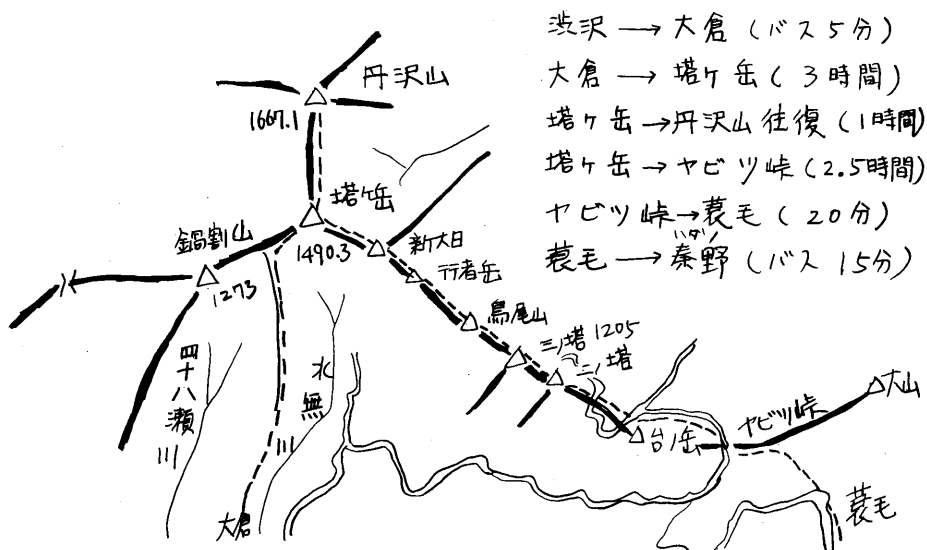
翌6月26日、相乗りタクシーで松本へ向った。村営ホテルからタクシー乗場への道中、河童橋から穂高を眺めると分厚い雲に被われ、雨が降っている模様であった。それが、屏風への飾りめとなり、せめてもの慰めであった。

丹沢山

幸内義孝

7月7日～8日

東京近郊の山でよく知られている山、丹沢山へ行ってみたかった。六甲山程の道が頂上迄つけれ、大倉は浅沢より1時間おきにバスがやってくる。降車すると飯屋が2～3軒あって大変繁盛しているようだ。大倉～塔ヶ岳～丹沢山～塔ヶ岳～ヤビツ峠～蓑毛迄一日あれば、充分のコースである。富士山をかなり遠くに眺められた。



北 信 五 山

山本泰彦

昭和54年8月14日～18日

8月14日(晴) 魚津駅—直江津駅—黒姫駅—下荒瀬原バス停—
斑尾山登山口(幕営)

8月15日(霧のち晴) 幕営地(5:50)—釜石山(6:25)—斑
尾山(1381.8m)(7:15～7:30)—釜石山(7:55)—幕営地
(8:20～40)—下荒瀬原(8:55～9:24)—黒姫駅(9:50～
11:00)—戸隠中社(11:30)—飯綱山西登山口(12:00)—飯綱山
(1917.4m)(13:40～14:00)—瑠璃山(14:35)—登山口(15:
40～16:10)—隨身門(17:10)

夏山合宿が中途半端で終り、休暇も残ったので、北信五山(斑尾山、飯綱山、戸隠山、黒姫山、妙高山)を訪れることにした。魚津で帰神する旨と別れ、直江津で地図を買ひ、黒姫駅から土橋行のバスに乗り下荒瀬原で降り、夕暮の林道終点で幕営する。さすがに下界は暑く素裸になる。それに付けてもこの合宿の態は何だ!毛勝谷を登るのが精一杯という有様では劔岳へ行かずに引返したリーダーの心情もわかるというものである。「あの人が行くなさ私も。」という安易な気持ちで(これを助長するような雰囲気があるのも確かだが)重荷で水もなくヤブコギすればどうなるかも考えず、ろくにトレーニングもせずに参加した人もしたのではないか?そんな人達のために劔岳を目前として引返すのであれば、まじめにトレーニングしてきた者はうかばれない。(僕も最近夜行列車がこたえるようになった。11つかバテるかも知れないので愚痴はこれくらいにしておこう。)そんなことを考えながら11時か眠りについた。

「斑尾山登山道・国鉄糸連柏原支部」の導標に従ってカウ松の林を行く。林道を3回横切り二谷目・釜石山で菅川からの道を合せると尾根道となり、蟻の戸渡り、ハチ睨を過ぎ、頂上の広場に着く。一等三角点はこの上にあり、標石がめずかに出てゐる。東面の斑尾スキー場から立派な登山道が通じているので、荒瀬原からのものはあまり手入れされてゐない。

往路を戻り、黒姫駅前のスーパーで食料を調達して戸隠高原にはいる。

中社から林道をたどり瑠璃沢を渡って飯綱山西登山道に入る。巾広ハイキング道である。頂上は二峰に別れ、北峰に三角点がある。鋸齒の戸隠山の後にゴラミダルの高妻山がそそり立っている。下りは瑠璃山への道をとる。

鞍部から150mほど登り返すのにはうんざりさせられた。怪無山からの下りで蟻にあり、冷汗をかく。

8月16日(晴) 隨身門(6:20) — 奥社(6:35 ~ 6:45) — 五
十間長屋(7:20) — 戸隠山・八方睨(1911m)(8:10 ~ 20) —
不動(9:45 ~ 55) — 五地藏(10:40) — 高妻山(2352.8m)(
12:15 ~ 35) — 五地藏(13:35) — 不動(14:15) — 戸隠
牧場入口(15:30) — 隨身門(16:15 ~ 30) — 奥社入口(16:45 ~ 17:
05) — 大橋(17:20) — 黒姫山登山口(17:50)

静寂が支配する杉木立の参道を奥社へ、ここで水を補給して左手の支尾根
に取付く。百間長屋、天狗の露地、胸つき坂、剣の刃渡りといった仰々しい
名前の難場(?)を過ぎ戸隠山頂の八方睨に着く。(難場にある鎖は使用し
なくても容易に登れる。) 戸隠山は凝灰質集塊岩から成っているため、垂
壁にもブッシュが着いており迫力に欠ける。頂上からの展望は、高妻山のア
ルペンの風貌と対照に飯綱山が視野をゆったりと広げてくれるのが印象的であ
る。道があまり良いので運動靴で充分だなあと思いつつ歩いていると濡れた
岩に足をすべらせ膝を打ち、あまりの痛さにしゃがみこむ始末。慄心は禁物
である。一不動から二釈迦、三文珠、四普賢、五地藏、六弥勒、七薬師、八
観音、九勢至と8個のコブを越え大ダルミから高妻山へ急登する。平坦にな
った岩稜を10分ほどたどり阿弥陀如来を過ぎると岩のテラスのある頂上に
着く。あいにく霧に包まれたため展望はない。痛む膝を労わりつつ往路を戻
り一不動から戸隠牧場へ下る。

8月17日(晴) 黒姫山登山口(6:10) — 新道分岐(6:40 ~ 50)
— 黒姫山(2053.4m)(8:50 ~ 9:30) — 大池(10:05) — 西登山
口(11:05 ~ 15) — 佐渡山造林小屋跡(12:00) — 氷沢川(12:
20 ~ 50) — 笹ヶ峰ダム(14:00 ~ 30) — 登山口(15:00) — 黒
沢(15:50 ~ 16:00) — ニノ沢(17:20)

ゆったりした七曲りを至て、新道分岐で黒姫山新道に行く。外輪山に登り
着くまでの径は笹におおわれ、霧のためずぶぬれになって黒姫山頂上に着く
。ここの三角点は戸隠・九頭龍山と同様、標石でなく、平らな岩に十字が刻
んである。眼下に展開する北信濃の盆地をながめながら靴下を干す。西へ急
降下し、伝説を秘めた七ツ池、大池を訪れる。大池には山椒魚が多数生息し
ている。ここから整備のいき届いた西登山道を下り、笹ヶ峰と戸隠を結ぶ大

ダルミ越えの径に入り、笹ヶ峰を目指す。径はし、かりしてりるものの手入れがなされてりなりのか笹が繁り歩きにくり。沢沢川は石下り気味に渡渉する。ここから高田管林署の管内となり、径もよく手入れされてりる。笹ヶ峰ダム堰堤上を通り30分ほど歩くとバス道に出る。左へ少し行くと高谷池への登山道に入り、富士見平手前の二ノ沢で幕営する。

8月18日(霧のち晴) 二ノ沢(4:40) — 富士見平(4:50) — 高谷池(5:20 ~ 6:50) — 火打山(2462.0m)(7:55 ~ 8:10) — 高谷池(8:55 ~ 9:05) — 黒沢池ヒュッテ(9:50 ~ 10:15) — 大倉越(10:35) — 妙高山(2445.9m)(12:20 ~ 50) — 天狗堂(13:35) — 燕温泉(14:50 ~ 15:45) — 妙高高原駅 — 長野 — 神戸

メルヘン的な高谷池ヒュッテ前で朝食を摂る。台風が日本海を北上してりることをうつつが伝え、山は霧に包まれてりる。火打山を往復する。(焼山は噴火のため、入山禁止中)茶臼山を過ぎ、黒沢池ヒュッテ近くで雨にあり、小屋で雨宿りする。通り雨だったのかすぐにあがったので妙高山目指し大倉越へ向う。

大倉越から見上げると妙高はなかなか立派である。急坂を登り、一等三角点のある北峰に着く。東側は晴れてあり、斑尾山が野尻湖を抱いてりるのがみえる。岩塊を縫って南峰へ行き、妙高大神に参拝する。あとは燕温泉を目指してどんどん下る。北地獄谷の長り木平道にうんざりした頃、立派な旅館が並ぶ燕温泉に着く。共同風呂は修理中とのこと、5分ほど歩いた吊橋の下で露天風呂で一週間の汗を流し、夜行列車の人となる。

北信五山は、おおむね独立峰に近く、一つの山に登るのであれば、標高差700 ~ 1100mで楽であるが、これらをつなぐことにより南アルプスの縦走に似たハードなものとなりうる。

飯綱と妙高・火打は登山者もいたが、他はほとんど人に危めなり静かな山行ができ、合宿の傷心をリやすには適切であった。



黒部丸山東壁緑ルート

小林利雄

昭和 54 年 9 月 8 日 ~ 9 日 メンバー 屋野、小林

9 月 8 日 黒部ダム (7:50) — 内蔵助谷ベース (9:05) — 取付 (9:45 ~ 10:10) — 中央バンド (15:10) — ビバーク地 (24:00)

早朝の信濃大町に降り立ち扇沢までタクシーで入る。まだ早いのが人影もまだらである。高いコーヒーを飲み、にぎり飯を食べている頃より急に人数が増してくる。どこかの団体であろうか？ トロリーの発車時間になり、一路黒部ダムへと歩を進める。バスを降り立ち、殆どの方は黒部ダムへと進むが、我々は反対方向へと進んでいく。ダムから見る丸山東壁はすぐ近くに見えるが、2 時間位いかかると屋野氏曰く。

大サテガビンの岩壁のスケールの大きいこと、丸山が小さく見える。旧日電歩道をピッチを上げてベースへと急ぐ。なんと、屋野氏のピッチの速いこと、まるで鬼と亀である。ベースに着くのになんと 1 時間 10 分である。快調なベースである。

ベースで必要なものを置き、東壁へと急ぐ。いよいよ緑ルートの登攀開始である。まず僕が快調にザイルを延ばす。このピッチは水にぬれていて非常にイヤな所であった。つるべで登るけれども僕がトップにいくと時間ばかりくってその割にザイルが延びない。悪いと思いながらもう一向にペースがあがりない。中央バンドは広くここで小休止、行動食を食べる。

ハンゲ上から昨日降った雨のしずくがしきりに落ちてくる。今からスハンゲへと向う。ハンゲ下の垂壁を僕が登り、スハンゲ下でビレーをする。いよいよスハンゲの突破である。屋野氏が快調にザイルを延ばし、途中で写真をパチリと余裕がある。いよいよ僕の番である。体全体が宙に浮きまさに空中遊泳である。しかしモタモタとはしておれない。夜がそこまで手を延ばしているのだ。僕がハンゲを越したあたりで夜の帳が降りてくる。

暗くなったので、トップを屋野氏がひきうけてくれる。ヘッドラの明りだけでよくルートがわかるものだなあと感心する。セコンドでもルートがわからないうのに……。このあたりから猛烈に喉が渇きだす。岩にしみている水も欲しりくさりである。それと比べ屋野氏のタツなこと!! 夜中の 24 時にビバーク決定。ホットする。しかしこういってビバークもオツなもので黒部の灯が見えている。

9 月 9 日 ビバーク地出発 (10:00) — 頂上 (10:20) — 内蔵

助谷 (10:50) — ベース (11:30~13:00) — 黒部ダム (14:10)

今日は水が飲めるなあと思いつつ頂上を目指して進む。頂上はブッシュにおおわれているが、なかなかよい所である。内蔵助平への下降は草付のイヤな所が多くあり、一ヶ所懸垂で降りる。平へ着き水分を補給し、あとはベースへと下るだけである。ベースで食事をし黒部ダムへと急ぎ、大野より一路神戸へと帰る。

苦しかったけれど満足のいく登攀であった。

明神岳五峰東壁中央リネ

神田章吉

昭和54年9月14日~15日 メンバー 神田, 上原, 川辺

9月14日 上高地 (7:00) — 明神小屋 (8:30) — 取付き (10:30) — F₃ 上部 (16:30)

朝から小雨。明神山荘までは7人でたのしい話。田部さん、川崎さん、松井さん、みんなユニークな人たちである。こんな人達とお近づきになれたのも、萩本さんの御陰かしら。屏風岩へ行く4人に別れを告げ、川を渡って右に道を取り、養魚場の横から筈道を行く。潮沢を渡り、ガレ状のデルタ帯を登り、取付き。ガスにて視界悪し。上の方が全々見えぬ。

1P, F₁ を左からまく。最初から少々かぶっていて荷で後に引かれる。空身で行き、2人を引き上げた後、クライムダウンして登り直す。

2P目、ガレ場を登る。3P目トラバースして、F₁ の上部まで。コンテでF₂ の下まで。F₂ はぬれており、リヤらしいがフリクションは効く。(4P) コンテのあとF₃。手前にフィックスギールが残っていた。F₃ は右手のスラブをいくが、ぬれているのともろいのとハーケンがないので四苦八苦。10m程登ってからクライムダウン。正ちゃんに荷を分けてもってモグラことにし、再び取付き。少々かぶっているところを乗り越し、左の滝口までトラバース。ぬれていて、すべりそう。滝口を登ろうとするが、持つ岩が全部はがれそう。登ったり、降りたりしているうちに、右手にリスをみつけ、ハーケンをたたき込みランニングビレイをして乗り越す。上でもう1本。F₃ を抜けたところにハーケンを打ってビレイ。セカンドの川辺さんをジョッヘルしたあと、川辺さんが正ちゃんをジョッヘルしている間、上に見える洞窟まで登る。ズルズルのガレ場。下から見るより傾斜は急なため、ビバークには適さないと考え、F₃ の上のテラスに戻る。ここを越すと、カールボーデンで事実上の取付きとなるのであるが、ここまでの間に時間がかかり

過ぎてりるし、岩の状態がぬれていて悪く、又、モロモロであるということから考えて、明日晴れなければ降りようとする。

夕闇が、ガスの中で迫ってきた。ルンゼというのは陰湿でいやだ。それにガスだ。雨がドシャブリになれば大変なことになると思ひ、登っている途中でも気が気ではない。テラスは逆層で、狭く、ボルト2本ハーケン3本を打って体からのザイルを固定、吊天を被り足を曲げたままのビバーク。西をチビリとやり、正ちゃんのひざをテーブルにして、山本氏から借り受けたコンロで、ココア。(このコンロは軽いし、予熱がいらないので便利だ。) 山の話、正ちゃんの結婚話も?

夜中より雨、風、それでなくてもズルズル滑って落ちそうなのに、尻の下を水が流れていく。体中はビショビショとなるし、寒いし一晩中寝れない。

9月15日 出発(6:00) — 取付き(10:30) — 明神山荘(13:00) — 上高地(13:40)

あまり寒いので、正ちゃんと川辺さんを道連れにして起き、暖をとる。水と食料をとり吊天から出た瞬間、ゴ—ッという不気味な音、ガス、強風雨。なんと、きのうまでぬれてこまとしていたが水など流れていなか、た下3が滝になってある。いや、このルンゼ自体が滝である。恐怖、恐怖。さあ降りよう。下3は、きのう打ったボルトで懸垂下降(1P)。2P、石にシュリンゲをかけ、懸垂。3P、打ってあったボルトにてF2を下降中、ザイルがもつれ、滝の真直中に頭から水を被る。パンツまでぬれる。川辺さん、正ちゃんの順で降りてくる。

4P以下、8Pまで懸垂、ボルト、ハーケン類はほとんどないので、ボルト9本、ハーケン3本使用。なんだか、下降ルートを作りに行ったような感じがする。体がぬれて、冷えて、歯ががみ合わない。取付きまで降り、ガレガレのデルタ帯を下り、明神山荘へ。雨は、まだ降り続くし相当疲労していることから考え、前穂はあきらめることとする。上高地まで歩き帰神。

みなさん、タクシーはマルキチタクシーにしましょう。親切です!



Komafusa